

久米高畑遺跡

— 55 次・56 次調査 —

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

2020

松山市教育委員会

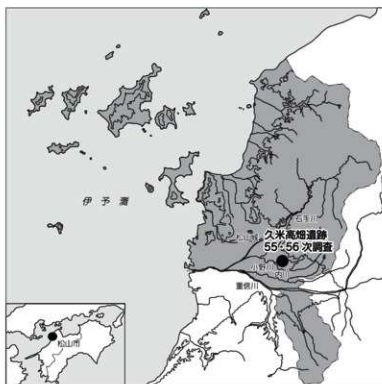
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

く め た か ば た け
久米高畑遺跡

— 55次・56次調査 —

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書



2020

松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

序 言

本書は平成14年度に国庫補助を受けて実施した久米高畑遺跡55次調査と同56次調査の成果をまとめた調査報告書です。今回の調査は、遺跡群南西部と東部における官衙の広がり把握することを目的として実施しました。

遺跡群東部にある久米高畑遺跡55次調査では、弥生時代前期末から中期初頭頃の大溝を発見しました。最大幅4.6m、深さ1.1mの溝で、溝からは大量の土器や石器が出土しています。来住台地上では、これまでに同時期の大溝が数箇所で見つかっており、溝の形状や規模等を解明するうえで貴重な資料を得ることができました。

一方、遺跡群南西部にある久米高畑遺跡56次調査からは、弥生時代前期の土坑などが見つかっています。残念ながら、官衙に関連する資料は得られませんでした。弥生時代や近世、近代における来住台地上の様相がうかがえる調査成果を得ることができました。

このような成果を得られましたのも、埋蔵文化財に対する関係各位のご理解とご協力の賜物であり、厚くお礼申し上げます。つきましては、本書が来住台地上に展開する遺跡の様相解明や埋蔵文化財研究の一助となり、普及・啓蒙や調査・研究にご活用いただければ幸いに存じます。

令和2年3月25日

松山市教育長
藤田 仁

例 言

1. 本書は財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（現 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター）が、平成 14 年度に久米官衙遺跡群内における重要遺跡確認調査として実施した 2 遺跡の発掘調査成果をまとめた調査報告書である。
2. 遺構は、呼称名を略号化して記述した。
溝：SD、土坑：SK、柱穴：SP
3. 本書で使用した標高値は海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした方眼北で世界測地系に準拠した。
4. 本書で報告した遺構埋土及び土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」（2006）に準拠した。
5. 本書掲載の遺構図や実測図の縮分は、縮分値をスケール下に記した。
6. 報告書作成に伴う遺物の復元・実測・製図及び遺構の製図は、整理担当者である宮内 慎一の指導のもと、重松 希依、二宮 八咲、山之内 聖子が行った。
7. 本書掲載の遺構写真は調査担当者の小玉 亜希子が撮影し、遺物写真の撮影は大西 朋子が行った。なお、写真図版の作成は宮内と大西が担当した。
8. 発掘調査における国土座標軸測量は、株式会社バスコに業務を委託した。
9. 本書の執筆は宮内が担当し、浄書は平岡 直美が行った。
10. 本書で作成した図面・記録類及び出土品は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
11. 報告書抄録は、巻末に掲載している。

本文目次

第 1 章	はじめに	1
第 1 節	調査に至る経緯	1
第 2 節	調査・整理及び編集刊行組織	1
第 2 章	遺跡の立地と歴史的環境	3
第 1 節	遺跡の立地	3
第 2 節	歴史的環境	5
第 3 章	久米高畑遺跡 55 次調査	9
第 1 節	調査の経緯	9
第 2 節	層位	10
第 3 節	遺構と遺物	15
第 4 節	小 結	37
第 4 章	久米高畑遺跡 56 次調査	49
第 1 節	調査の経緯	49
第 2 節	層位	50
第 3 節	遺構と遺物	50
第 4 節	小 結	61
第 5 章	調査の成果と課題	67

挿図目次

第2章 遺跡の立地と歴史的環境	
第1図	松山平野の地形概要図 (縮尺1:200,000) 3
第2図	久米高畑遺跡55次・56次調査地位置図 (縮尺1:2,000) 4
第3図	周辺遺跡分布図 (縮尺1:15,000) 6
第3章 久米高畑遺跡55次調査	
第4図	調査地位置図 (縮尺1:400) 9
第5図	東壁土層図 (縮尺1:40) 10
第6図	南壁土層図 (縮尺1:40) 11
第7図	北壁土層図 (縮尺1:40) 12
第8図	遺構配置図 (1) (縮尺1:125) 13
第9図	遺構配置図 (2) (縮尺1:125) 14
第10図	SD1ベルト断面図 (縮尺1:40) 16
第11図	SD1下層出土遺物実測図 (1) (縮尺1:4) 18
第12図	SD1下層出土遺物実測図 (2) (縮尺1:4) 19
第13図	SD1下層出土遺物実測図 (3) (縮尺1:4) 20
第14図	SD1下層出土遺物実測図 (4) (縮尺1:4) 21
第15図	SD1下層出土遺物実測図 (5) (縮尺1:4) 23
第16図	SD1下層出土遺物実測図 (6) (縮尺1:6、1:4) 24
第17図	SD1下層出土遺物実測図 (7) (縮尺1:4、1:3、1:2) 25
第18図	SD1中層出土遺物実測図 (1) (縮尺1:4) 27
第19図	SD1中層出土遺物実測図 (2) (縮尺1:4、1:3、1:2) 28
第20図	SD1ベルト・トレンチ出土遺物実測図 (縮尺1:4、1:3、1:2) 29
第21図	SD1地点不明出土遺物実測図 (縮尺1:3) 30
第22図	SD15断面図 (縮尺1:20) 31
第23図	SD2断面図・出土遺物実測図 (縮尺1:40、1:4) 31
第24図	SD3～14・16断面図 (縮尺1:40) 33
第25図	SD5・11・16出土遺物実測図 (縮尺1:4、1:3) 34
第26図	SK1測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:30、1:4) 35
第27図	SK2測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:30、1:4) 36
第28図	SK3測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:30、1:4) 37
第29図	第Ⅲ層出土遺物実測図 (縮尺1:4、1:3) 38
第4章 久米高畑遺跡56次調査	
第30図	調査地位置図 (縮尺1:600) 49
第31図	西壁土層図 (1) (縮尺1:40) 51
第32図	西壁 (2)・北壁土層図 (縮尺1:40) 52
第33図	遺構配置図 (縮尺1:200) 53
第34図	SD1～6断面図 (縮尺1:20) 54
第35図	SK1測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:40、1:4) 55

第36図	SK2 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:40、1:4)	56
第37図	SK3 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:40、1:3)	57
第38図	SK4 測量図 (縮尺1:40)	
第39図	SK5 測量図 (縮尺1:40)	58
第40図	SK6 測量図 (縮尺1:40)	
第41図	SK6 出土遺物実測図 (縮尺1:3)	59
第42図	SK7 測量図 (縮尺1:40)	
第43図	SK8・9 測量図 (縮尺1:40)	60
第44図	地点不明出土遺物実測図 (1) (縮尺1:3)	62
第45図	地点不明出土遺物実測図 (2) (縮尺1:3)	63
第5章 調査の成果と課題		
第46図	久米高畑遺跡 25次・55次大溝 (縮尺1:1,500)	67

表 目 次

第1章 はじめに		
表1	調査地一覧	1
第3章 久米高畑遺跡 55次調査		
表2	溝一覧	40
表3	土坑一覧	
表4	柱穴一覧	
表5	SD1 下層出土遺物観察表 (土製品)	41
表6	SD1 下層出土遺物観察表 (石製品)	45
表7	SD1 中層出土遺物観察表 (土製品)	
表8	SD1 中層出土遺物観察表 (石製品)	46
表9	SD1 ベルト・トレンチ出土遺物観察表 (土製品)	47
表10	SD1 ベルト・トレンチ出土遺物観察表 (石製品)	
表11	SD1 地点不明出土遺物観察表 (土製品)	
表12	SD1 地点不明出土遺物観察表 (石製品)	
表13	溝出土遺物観察表 (土製品)	
表14	SK 出土遺物観察表 (土製品)	48
表15	第Ⅲ層出土遺物観察表 (土製品)	
第4章 久米高畑遺跡 56次調査		
表16	溝一覧	64
表17	土坑一覧	
表18	柱穴一覧	65
表19	SK1 出土遺物観察表 (土製品)	
表20	SK2 出土遺物観察表 (土製品)	66
表21	SK3 出土遺物観察表 (土製品)	

表 22	SK6 出土遺物観察表（土製品）	66
表 23	地点不明出土遺物観察表（土製品）	
第 5 章 調査の成果と課題		
表 24	来住台地上の大溝一覽	68
表 25	甕形土器の施文一覽	69
表 26	壺形土器の口縁部施文一覽	
表 27	壺形土器の頸部・肩部・胴部施文一覽	

写真図版目次

第 3 章 久米高畑遺跡 55 次調査

図版 1	1. 遺構検出状況（東より） 2. 遺構完掘状況（東より）
図版 2	1. SD4・5・6 検出状況（北東より） 2. SD1 ベルト①土層（東より）
図版 3	1. SD1 ベルト②土層（東より） 2. SD15・SK2 検出状況（東より）
図版 4	1. SK1 検出状況（東より） 2. SP34 検出状況（北より）
図版 5	1. SD1 下層出土遺物①
図版 6	1. SD1 下層出土遺物②
図版 7	1. SD1 下層出土遺物③
図版 8	1. SD1 下層出土遺物④
図版 9	1. SD1 中層出土遺物①
図版 10	1. 出土遺物（SD1 中層②：109～112、SD1 ベルト・トレンチ：118～121、SD1 地点不明：123・124）
図版 11	1. 出土遺物（SD5：130、SD11：132、SK1：134、第Ⅲ層：140・143～146）

第 4 章 久米高畑遺跡 56 次調査

図版 12	1. 完掘状況（南より）
図版 13	1. 南壁土層（北西より） 2. SD1 検出状況（北より）
図版 14	1. SK1 検出状況（南東より） 2. SK2 検出状況（北東より）
図版 15	1. SK3 検出状況（北西より） 2. SK3・5・7・8 検出状況（南より）
図版 16	1. 出土遺物（SK1：147、SK2：148、SK3：149、SK6：150、地点不明：155・159・163・165）

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

松山市は1989（平成元）年度より、国から補助を受けて個人住宅の建設や中小零細開発等に伴う発掘調査（本発掘調査という。）及び重要遺跡の保護を目的とした範囲や性格を確認する調査（重要遺跡確認調査という。）を実施している。1990（平成2）年10月の財団設立以降は、必要に応じて財団の調査員を招聘し、これらの調査に従事する形式を採用している。しかしながら、財団との間における業務分担が見直され、平成17年度からは文化庁の承諾を得たうえで、史跡を除く市内一円を対象とした発掘調査や重要遺跡確認調査、及び試掘調査並びに出土物整理作業や報告書編集業務等について財団と松山市教育委員会文化財課との間で委託契約を結び、業務を実施している。

本書掲載の久米高畑遺跡55次・56次調査は、ともに重要遺跡確認調査として実施したものであり、事前の試掘・確認調査は行っていない。久米高畑遺跡55次調査地は、久米官衙遺跡群の東端、同56次調査地は回廊状遺構の西方に位置している。両調査は、平成14年度に屋外調査を実施した。各調査地の所在地や調査面積、期間等は表1に記す。

第2節 調査・整理及び編集刊行組織

久米高畑遺跡55次・56次調査は、平成14年度に屋外調査を実施したが、発掘調査に伴う整理作業は屋外調査終了後に実施した。本格的な報告書作成に伴う整理作業は、2018（平成30）年10月より、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが業務を実施した。平成30年度には調査で出土した遺物の接合・復元・実測及び報告書掲載用の土層図や遺構図面類の作成を行い、翌年、2019（平成31）年3月29日に終了した。2019（平成31）年4月からは遺構図や実測図のデジタルトレース作業をし、遺物写真撮影後に報告書の編集作業を行った。

表1 調査地一覧

調査名	所在地	調査期間	調査面積 (m)
久米高畑遺跡（55次）	松山市南久米町715番地4、715番地5	H14.7.29～H14.11.11	213.28
久米高畑遺跡（56次）	松山市来住町919・924番地	H14.11.18～H15.1.13	561.00

1. 調査組織〔平成14年度〕

松山市教育委員会	教育長	中矢 陽三
事務局	局長	武井 正浩
	企画官	川口 岸雄
	企画官	石丸 修
文化財課	課長	馬場 洋
	主幹	八木 方人
	副主幹	田城 武志
	副主幹	重松 佳久

財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	中村 時弘
	事務局長	三宅 泰生
	事務局次長	菅 嘉見
	事務局次長	森 和朋
埋蔵文化財センター	所長	中川 孝
	専門監	野本 力
	次長兼調査係長	西尾 幸則
	調査員	小玉 亜希子

2. 整理組織〔平成30年度〕

松山市教育委員会	教育長	藤田 仁
事務局	局長	家串 正治
	次長	高田 稔
	次長	高木 伸治
	次長	大木 光治
文化財課	課長	沖広 善久
	主幹	越智 茂樹
	主査	西村 直人

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	理事長	中山 紘治郎 (前任、～5/29)
	理事長	本田 元広 (5/30～)
事務局	局長	片山 雅央
	次長兼総務部長	高木 祝二
	文化振興部長	小田 克己
埋蔵文化財センター	所長	村上 卓也
	考古館館長	梅木 謙一
	主任	宮内 慎一 (整理担当)

3. 編集刊行組織〔平成31年4月1日現在〕

【刊行組織】

松山市教育委員会	教育長	藤田 仁
事務局	局長	白石 浩人
	次長	高田 稔
	次長	重松 一禎
文化財課	課長	渡部 浩典
	副主幹	楠 寛輝

【編集組織】

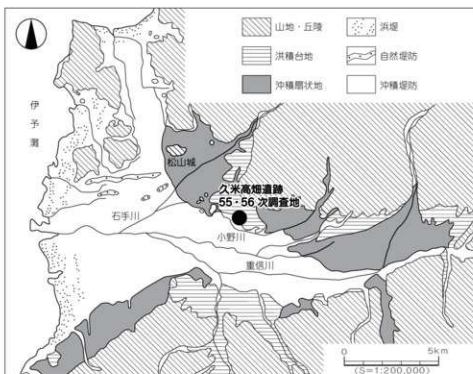
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	理事長	本田 元広
事務局	局長	片山 雅央
	次長	大野 昌孝
施設管理部	部長	片上 俊哉
埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	梅木 謙一
	主任	宮内 慎一 (整理担当)

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

本稿掲載の遺跡が所在する來住台地は、松山平野北東部に位置している。地質学的には、高縄山塊に源を発した小野川によって形成された洪積世の段丘と扇状地堆積物上に立地している。具体的には東西3km、南北1.5kmの区域のうち、地区北側を流れる堀越川と南側の小野川とによって挟まれたエリアは河川の浸食による段丘地形を辺縁とする微高地状の地形をなす。來住台地上には、來住庵寺を含む久米官衙遺跡群が展開しており、この中心は堀越川の段丘を背にして、南側を蛇行しながら西流する小野川周辺の低地部を正面とするエリアに立地している。

久米高畑遺跡 55 次調査地は台地の東方に立地し、久米高畑遺跡 56 次調査地は台地南西部に立地している（第1図）。



第1図 松山平野の地形概要図



第2図 久米高畑遺跡55次・56次調査地位位置図

第2節 歴史的環境

ここでは、調査地が所在する来住台地上における遺跡分布を中心に概要を説明する（第3図）。

旧石器時代

旧石器時代の遺物は来住台地上に限らず、松山平野内では遺構と伴って出土した事例は知られていない。全て採集資料であり、単独での出土である。台地上での出土例はないが、台地の東方、鷹子町にある五郎兵衛谷古墳群の調査では、サヌカイト製の角錐状石器が出土し、さらに平井町山田池ではナイフ形石器が採集されている。

縄文時代

台地上では、晩期の資料が報告されている。久米高畑遺跡36次調査では晩期後葉の土器群が出土した円形堅穴建物1棟が検出されているほか、同26・35次調査からも同時期の土坑が検出されている。また、晩期末葉では台地の西方にある南久米片廻遺跡2次調査において朱塗りの壺や刻目凸帯文を施す深鉢などが出土している。

弥生時代

縄文時代には点在していた遺跡も、弥生時代には面的な広がりを見せ、遺跡数も飛躍的に増大する。とりわけ、注目されるのが前期末から中期初頭の集落である。集落形態は少数の円形堅穴建物と土坑（貯蔵穴）などによって構成されるが、久米高畑遺跡23・25・28・29次調査からは幅3m、深さ1mを超える大型溝が検出されており、環濠を伴う集落の存在が明らかになりつつある。

中期では前半の資料は少ないが、中期後半から後期初頭にかけては複数の遺跡が発見されている。来住庵寺15次調査では台地縁辺部の落ち際に、凹線文段階の遺物が大量に投棄されていた。この中には完形品が多数含まれることから、良好な一括資料として評価されている。後期の遺構は多くはなく、面としての広がりは把握されていないのが現状である。久米高畑遺跡10・27・58次調査では堅穴建物をはじめ溝や土坑などが報告されている。これらのことから、来住台地上では弥生時代を通して継続的に集落が営まれていたことがわかる。

古墳時代

前期の資料は稀薄であるが、中期から後期では久米高畑遺跡10・26・35・60・64次調査などから堅穴建物や掘立柱建物、溝、土坑等が数多く検出されている。とりわけ、64次調査からは一辺7mを超える後期の大型堅穴建物を検出したことから、7世紀代になり来住台地上に展開する官衙遺跡群や古代寺院成立の基盤となる地方豪族の存在が示唆される。古墳については、台地内には検出されていない。周辺で前期古墳は確認されておらず、中期から後期の大型古墳が多数点在している。鷹子町に所在する素鷲神社古墳は、直径30mを超える松山平野でも最大の円墳とされている。また、台地南方、高井町の波賀部神社古墳や台地西方、北久米町の二つ塚古墳など、松山平野では数少ない後期の前方後円墳が分布している。



(S=1:15,000)

- | | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|------------------|
| ① 久米高畑遺跡 55 次調査 | ② 久米高畑遺跡 56 次調査 | ③ 久米高畑遺跡 7 次調査 | ④ 久米高畑遺跡 10 次調査 |
| ⑤ 久米高畑遺跡 23 次調査 | ⑥ 久米高畑遺跡 25 次調査 | ⑦ 久米高畑遺跡 26 次調査 | ⑧ 久米高畑遺跡 27 次調査 |
| ⑨ 久米高畑遺跡 28 次調査 | ⑩ 久米高畑遺跡 29 次調査 | ⑪ 久米高畑遺跡 35 次調査 | ⑫ 久米高畑遺跡 36 次調査 |
| ⑬ 久米高畑遺跡 58 次調査 | ⑭ 久米高畑遺跡 60 次調査 | ⑮ 久米高畑遺跡 64 次調査 | ⑯ 栗住庵寺 15 次調査 |
| ⑰ 栗住庵寺 21 次調査 | ⑱ 栗住庵寺 24 次調査 | ⑲ 栗住庵寺 37 次調査 | ⑳ 南久米片廻り遺跡 2 次調査 |
| ㉑ 二つ塚古墳 | ㉒ 五郎兵衛谷古墳 | ㉓ 栗藪神社古墳 | ㉔ 坂留部神社古墳 |

第 3 図 周辺遺跡分布図

古 代

台地上では国指定史跡として知られる來住廃寺をはじめ、官衙関連遺構が多数検出されている。久米官衙遺跡群の調査は白鳳寺院跡とされる來住廃寺の調査が契機となって始まり、寺院隣接部にある回廊状遺構や方一町規模の区画割りが存在することなどが明らかになった。なお、久米高畑遺跡7次調査からは「久米評」線刻須恵器が出土し、同地域が評衛政庁であることが、より確定的となった。

中 世

鎌倉時代では、來住廃寺金堂の北東に所在する來住廃寺21・37次調査から、複数の掘立柱建物が重複して建てられていることが明らかになった。また、金堂の南東に隣接する來住廃寺24次調査からも中世後期から末葉頃の屋敷跡の一部が確認されている。

近 世

近世では、墓が確認されている。前述した來住廃寺15次調査では土墳墓が検出され、17世紀前半の肥前系陶器が副葬されていた。また、金堂基壇北側には平成11年度まで長隆寺という名称の寺院が営まれていた。長隆寺は江戸時代前期、天和3(1683)年に開山したと伝えられており、発掘調査により土塀跡や本堂基壇跡などが発見されている。なお、來住廃寺金堂基壇から長隆寺境内地までの地域は黄色粘土による造成土が広く堆積しており、粘土層の下には江戸時代末期の遺物を含む土壌が堆積している。これらのことから、來住廃寺金堂基壇周辺は幕末期から明治初期にかけて大規模な土地改変が行われていたことが分かる。

【参考文献】

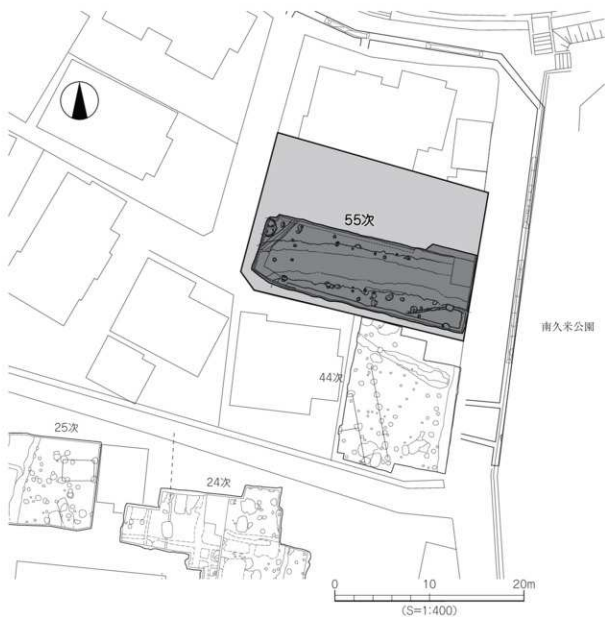
- | | | |
|--------|------|---|
| 森 光晴 | 1978 | 『五郎兵衛谷古墳』松山市文化財調査報告書 第13集 |
| 橋本 雄一 | 2013 | 『久米高畑遺跡36次調査』松山市文化財調査報告書 第166集 |
| 小玉 亜紀子 | 2008 | 『久米高畑遺跡-26次調査-』松山市文化財調査報告書 第127集 |
| 河野 史知 | 2004 | 『久米高畑遺跡35次調査』『來住・久米地区の遺跡V』松山市文化財調査報告書 第101集 |
| 梅木 謙一 | 1996 | 『南久米片廻り遺跡2次調査地』『小野川流域の遺跡』松山市文化財調査報告書 第57集 |
| 橋本 雄一 | 1995 | 『久米高畑遺跡23次調査』松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ |
| 高尾 和長 | 2003 | 『久米高畑遺跡-25次調査-』松山市文化財調査報告書 第93集 |
| 橋本 雄一 | 1997 | 『久米高畑遺跡28・29次調査』松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ |
| 西尾 幸則 | 1993 | 『來住廃寺 第15次調査』松山市文化財調査報告書 第34集 |
| 梅木 謙一 | 1994 | 『來住廃寺20次調査地』『來住・久米地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書 第44集 |
| 栗田 茂敏 | 2012 | 『南久米片廻り遺跡・久米窪田森元遺跡』松山市文化財調査報告書 第157集 |

- 宮内 慎一 2004 「久米高畑遺跡 10 次・27 次調査地」『來住・久米地区の遺跡 V』松山市文化財調査報告書 第 101 集
- 宮内 慎一 2016 「久米高畑遺跡 58 次・60 次・61 次調査」松山市文化財調査報告書 第 182 集
- 橋本 雄一 2005 「久米高畑遺跡 64 次調査」松山市埋蔵文化財調査年報 17
- 松山市教育委員会 1982 「波賀部神社古墳」『古代の松山平野 先土器時代～平安時代』
- 高尾 和長 2007 「北久米遺跡 4 次調査地（二つ塚古墳）」松山市埋蔵文化財調査年報 19
- 山之内 志郎 2007 「北久米遺跡 6 次調査地（二つ塚古墳）」松山市埋蔵文化財調査年報 19
- 橋本 雄一 2009 「久米高畑遺跡 1 次・7 次調査」松山市文化財調査報告書 第 136 集
- 水本 完児 1993 「來住庵寺 21 次調査地」松山市埋蔵文化財調査年報 V
- 相原 浩二 2010 「來住庵寺 37 次調査」松山市埋蔵文化財調査年報 22
- 橋本 雄一 2010 「來住庵寺 24 次調査」『史跡久米官衙遺跡群調査報告書 4』松山市文化財調査報告書 第 142 集

第3章 久米高畑遺跡 55次調査

第1節 調査の経緯

2002（平成14）年7月29日より、屋外調査を開始した。重機の使用により表土を掘削後、作業員による手作業にて包含層（第Ⅱ・Ⅲ層）の掘り下げや遺物の取り上げ及び遺構検出作業を行った。検出した遺構は溝や土坑、柱穴である。これらの遺構は重複しており、最初に時期の最も新しい遺構である溝の掘り下げに取り掛かった。調査区全域には数条の溝があり、それらの掘削と測量及び写真撮



第4図 調査地位置図

影を行った。その後、溝以外の土坑や柱穴の半截・掘削・測量等を行った。これらの作業終了後、時期の最も古い遺構である大溝の調査を開始した。大溝は、調査区全域で検出されている。

まず、土層堆積を確認するため、溝内に3本のセクションベルトを設定し、ベルト沿い先行トレンチを掘削した。その後、溝の南半部を掘り下げ、遺物の取り上げ後に完掘した。終了後は北半部を掘り下げ、測量と写真撮影を行い、同年11月11日に屋外作業を終了した。

第2節 層位 (第5～7図)

調査地は、調査以前は雑種地であった。現況の標高は、39.7m 前後である。調査で確認した土層は、以下の4種類である。

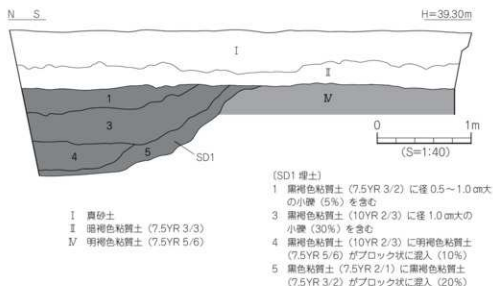
第I層：近現代の造成にかかる真砂土で、地表下20～45cmまで開発が行われている。

第II層：暗褐色粘質土 (7.5YR 3/3) で調査区全域にみられ、層厚は5～35cmである。本層中からは弥生土器や土師器、須恵器のほか近現代の陶磁器片などが出土している。

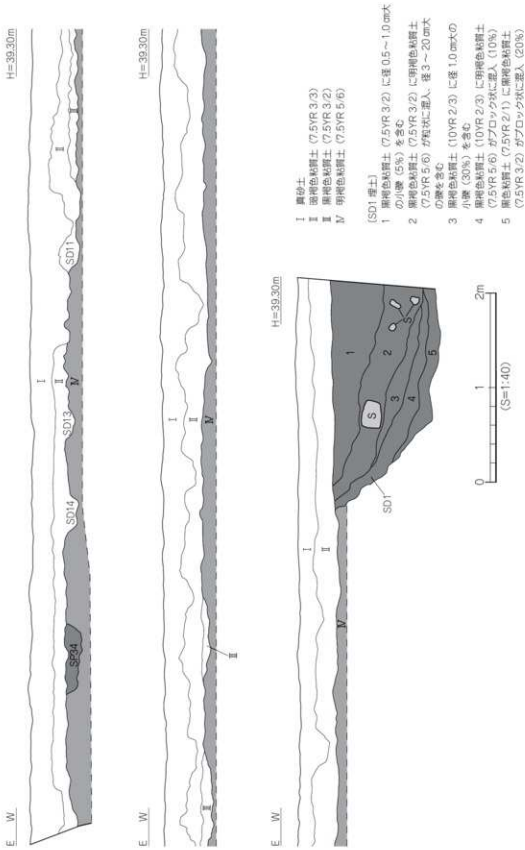
第III層：黒褐色粘質土 (7.5YR 3/2) で調査区南西部にみられ、層厚は3～10cmである。本層中からは縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器、石器等が出土した。

第IV層：明褐色粘質土 (7.5YR 5/6) で、本層上面が調査における最終遺構検出面である。調査では本層上面にて溝16条と土坑3基、柱穴37基を検出した。

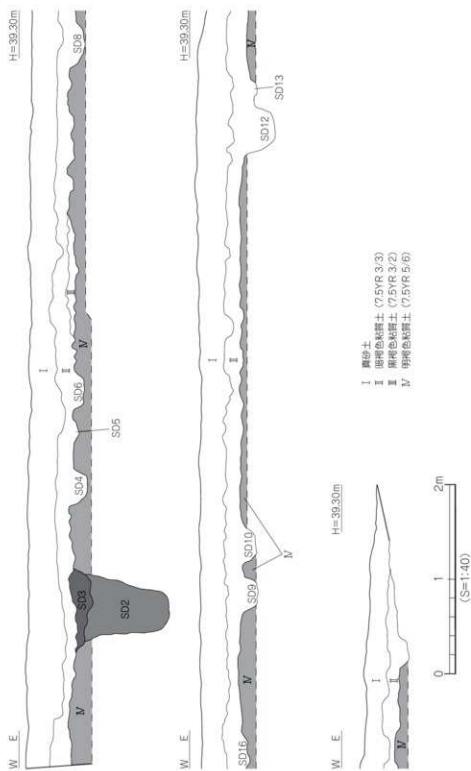
検出層位や出土遺物より、第III層は古墳時代までに堆積した土層と推測される。なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリッドに分けた。グリッドは南から北へA・B・C、西から東へ1・2・3・4・5・6とし、A1・A2……C6区といったグリッド名を付した。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。



第5図 東壁土層図

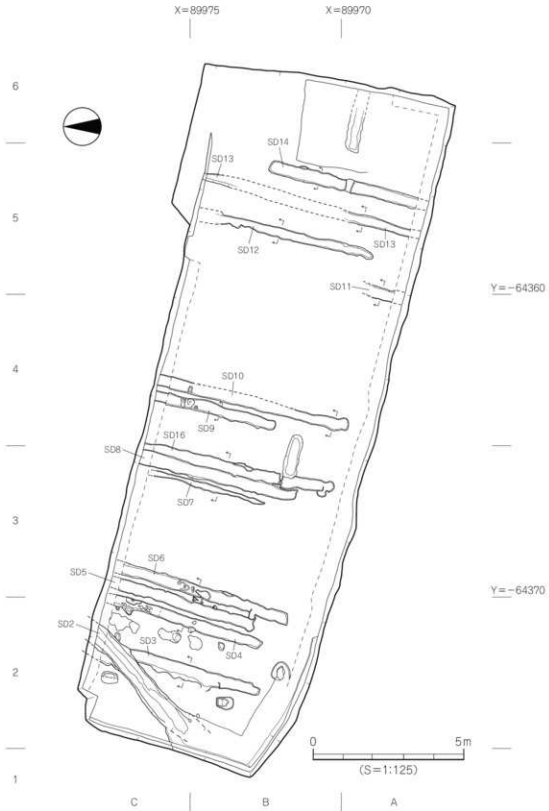


第 6 図 南壁土層図

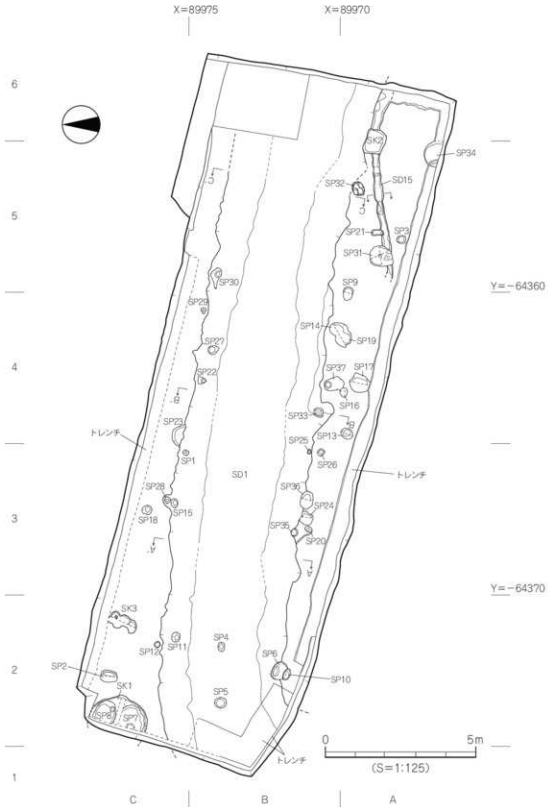


第 7 図 北壁土層図

層位



第8図 遺構配置図(1)



第9図 遺構配置図(2)

第3節 遺構と遺物

調査では、縄文時代から近現代までの遺構・遺物を検出した。検出した遺構は溝16条（弥生時代・近現代）、土坑3基（弥生時代）、柱穴37基である。遺物は縄文土器（晩期）、弥生土器（前期～後期）、土師器（古墳時代～古代）、須恵器（古墳時代）、陶磁器（近現代）、石器が出土した。なお、遺物の出土量は遺物収納箱（44×60×14cm）23箱分である。ここでは、検出した遺構別に説明する。

1. 溝

調査では、16条の溝を確認した。すべて、第IV層上面での検出であるが、2条の溝（SD1・15）は出土遺物や検出層位、埋土等より弥生時代の遺構である。なお、それ以外の溝は近現代の遺物を含む第II層で埋没していることから、概ね近現代の遺構と考えられる。

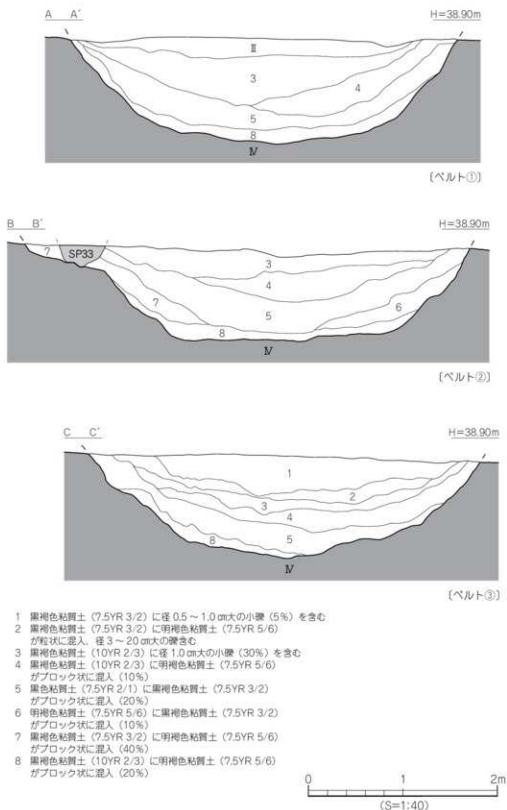
SD1（第9・10図、図版2・3）

調査区中央部A3～C4区で検出した東西方向の溝で、溝上面では14条の溝（SD2～14・16）や土坑SK2のほかにも多数の柱穴を確認した。ここでは、調査の経緯を含めて概要を説明する。

まず、南北方向に3本のセクションベルト（ベルト①～③）を設定し、さらに東西方向にもセクションベルト（ベルト④）を設定する。その後、ベルト沿いに先行トレンチを掘削し、土層の堆積状況を確認する。溝は便宜上、上層、中層、下層として掘削と遺物の取り上げを行った。

溝の規模は検出長23.00m、幅3.70～4.60m、深さは検出面下1.1mである。断面形態は「U」字状をなし、溝基底面は平坦である。基底面の標高は約37.6mであり、高低差は認められない。埋土は8種類に分層され、上位より1層：黒褐色粘質土（7.5YR 3/2）に径0.5～1cm大の小礫を含む、2層：黒褐色粘質土（7.5YR 3/2）に明褐色粘質土（7.5YR 5/6）が粒状に混入し、径3～20cm大の礫を含む、3層：黒褐色粘質土（10YR 2/3）に径1cm大の小礫を含む、4層：黒褐色粘質土（10YR 2/3）に明褐色粘質土（7.5YR 5/6）がブロック状に混入、5層：黒色粘質土（7.5YR 2/1）に黒褐色粘質土（7.5YR 3/2）がブロック状に混入、6層：明褐色粘質土（7.5YR 5/6）に黒褐色粘質土（7.5YR 3/2）がブロック状に少量混入、7層：黒褐色粘質土（7.5YR 3/2）に明褐色粘質土（7.5YR 5/6）がブロック状に混入、8層：黒褐色粘質土（10YR 2/3）に明褐色粘質土（7.5YR 5/6）がブロック状に混入である。溝の掘削は、上層が埋土1・2層、中層は埋土3・4層、下層は埋土5～8層が相当する。

遺物は溝上層からは古墳時代の土師器や須恵器片が出土したが、本来、SD1埋土1層は基本層序の第Ⅲ層と考えられるものである。埋土1層下の土層中からは、大量の弥生土器（前期末～中期初頭）や石器のほかにも縄文土器（晩期）が少量含まれていた。出土した弥生土器には完形品が少なく、大半は破片ばかりである。また、発掘調査中は上層、中層、下層の順に掘り下げと遺物の取り上げを行ったが、上層からは土器片が少量出土したのみで、大半の遺物は中層や下層から出土した。なお、調査開始時にはセクションベルト沿いに土層確認のための先行トレンチを掘削し、トレンチからも遺物が出土した。さらに調査終了時にはセクションベルトの除去を行い、ベルト内からも少量の遺物が出土した。先行トレンチやベルトからの出土遺物は出土層位が不明なものがあり、ここでは「ベルト・トレンチ出土遺物」として実測図を掲載している。



第 10 図 SD1 ベルト断面図

① 下層出土遺物 (第11～17図、図版5～8)

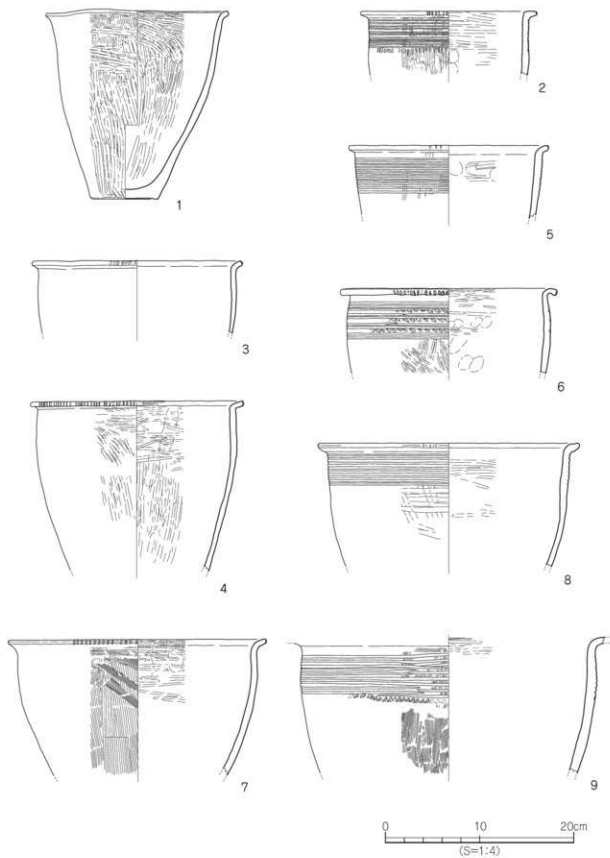
弥生土器 (1～80)

1～9は、折曲により口縁部を成形する甕形土器。1～6は口径18.2cm～22.1cmを測り、施文は口縁端部に刻目を施すもの5点(2～6)、胴部に櫛描き沈線文を施すもの1点(5)、櫛描き沈線文と刺突文を施すもの2点(2・6)がある。7～9は口径27cm以上のやや大型品で、7の口縁端部には刻目を施す。8は胴部外面にヘラ描き沈線文8条、9はヘラ描き沈線文9条と刺突文を施す。器表面の調整は、胴部内外面にヘラミガキを施すもの5点(1・2・4・6・8)、胴部外面はハケメ、内面にヘラミガキを施すもの2点(5・7)、内面のみヘラミガキを施すもの1点(9)がある。なお、3の調整は摩擦が著しく不明である。また、口縁部内面にヘラミガキを施すものが7点ある(1・2・4～7・9)。10～16は、貼付により口縁部を成形する甕形土器。10～14は口径20.2～24.2cmを測り、11の口縁端部には刻目、胴部にはヘラ描き沈線文5条(3段)と沈線文間に半截竹管文と竹管文を施す。12の胴部には、櫛描き沈線文4条(2段)と山形文を施す。13の口縁端部には刻目、胴部にはヘラ描き沈線文7条と刺突文を施す。14は口唇部より下がった位置に断面三角形の凸帯を貼付け、口唇部と凸帯上に刻目を施す。15・16は口径40cm以上の大型品で、口縁端部に刻目、胴部にはヘラ描き沈線文と刺突文を施す。器表面の調整は、胴部内外面にヘラミガキを施すもの3点(13・14・16)、胴部外面はハケメ、内面にヘラミガキを施すもの1点(11)、内面のみヘラミガキを施すもの1点(12)がある。なお、10・15は器表面の摩擦が著しく、調整は不明である。口縁部の調整では、外面にヘラミガキを施すもの1点(13)、内面にヘラミガキを施すもの4点(12～14・16)がある。

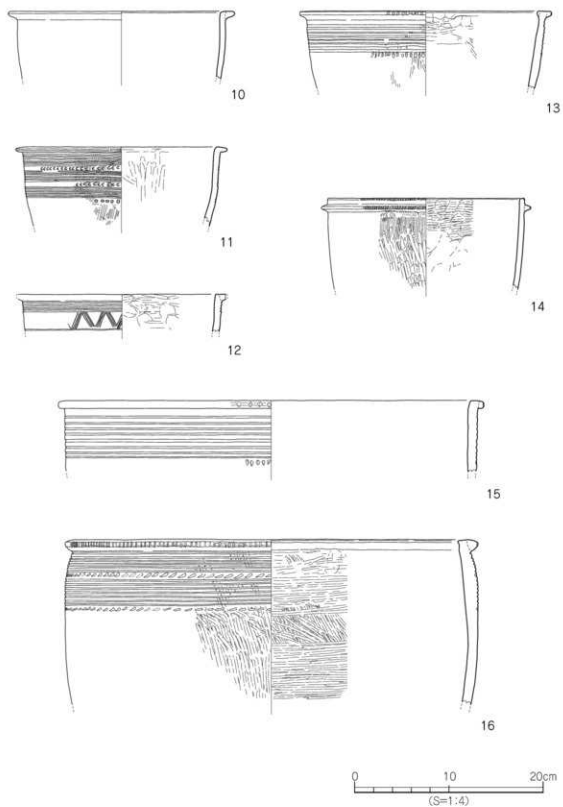
17～31は、甕形土器の底部。17～24は僅かに上げ底をなし、25～27は突出部をもつ底部である。28～30は所謂コシキ形土器。甕形土器の転用品で、底部に径0.8～1.3cm大の孔を穿つ(焼成後穿孔)。31は底径14.2cmの大型品で、僅かに上げ底をなす。胎土や調整等より31は16と同一個体と考えられる。器表面の調整は、内外面にヘラミガキを施すもの3点(20・21・30)、外面にヘラミガキを施すもの9点(17・19・23～26・28・29・31)、外面はハケメ、内面にはヘラミガキを施すもの2点(18・27)がある。1～31の胎土中には1～5mm大の石英や長石のほか金ウモンが含まれているが、赤色酸化土粒(シャモット)を含む土器2点(3・10)がある。

32は鉢形土器。推定口径32.0cmで、口縁部は折曲により成形されている。

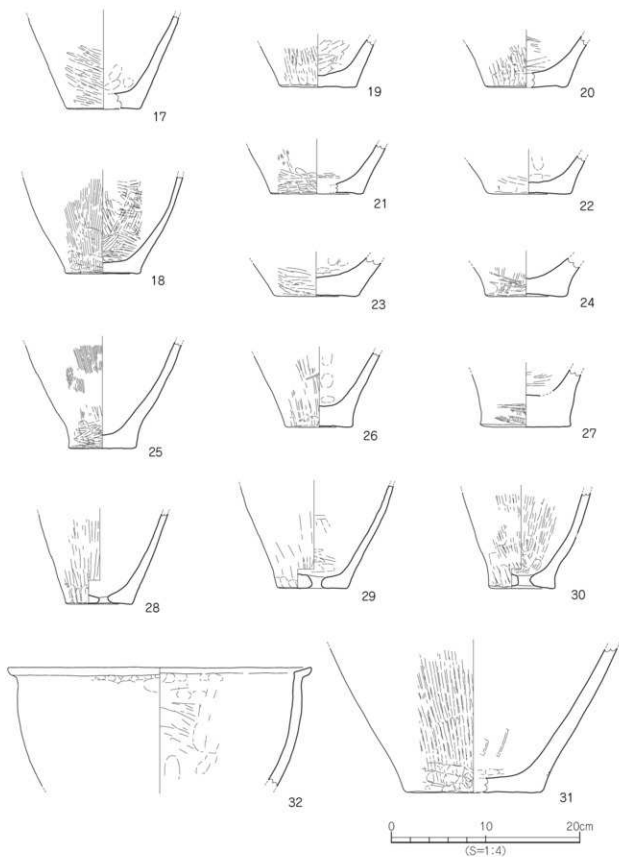
33～75は壺形土器。33～36は、短い頸部に短く外反する口縁部をもつ。頸部外面には、ヘラ描き沈線文を施すもの3点(33・34・36)と櫛描き沈線文を施すもの1点(35)がある。37～39は口縁部が外反するもので、37の頸部には櫛描き沈線文、39の口縁部には斜格子目文がみられる。40の口縁部は内湾し、頸部にはヘラ描き沈線文5条を施す。41・42は、長く伸びる頸部に短く外反する口縁部をもつ。41の口縁部には、斜格子目文を施す。43～47は大きく外反する口縁部をもち、45の頸部には櫛描き沈線文8条を施す。46・47は口縁部内面に断面三角形の凸帯を貼付け、47の口縁端部には沈線文1条がみられる。48は無頸壺で、口縁部に径0.4cm大の円孔2ヶを穿つ。頸部には、櫛描き沈線文6条と刺突文を施す。49は口径30cmを超える頸部径の大きな広口壺で、口縁部にヘラ描き沈線文と刻目、頸部にはヘラ描き沈線文3条を施す。また、口縁部内面には断面三角形の凸帯を貼付けている。器表面の調整は、頸部内外面にヘラミガキを施すもの11点(33・34・37～41・44・46・47・49)、頸部外面のみヘラミガキを施すもの2点(35・45)がある。なお、口縁部内面にヘラミガキを施すものは12点(33・34・36・38～42・44・46・47・49)である。



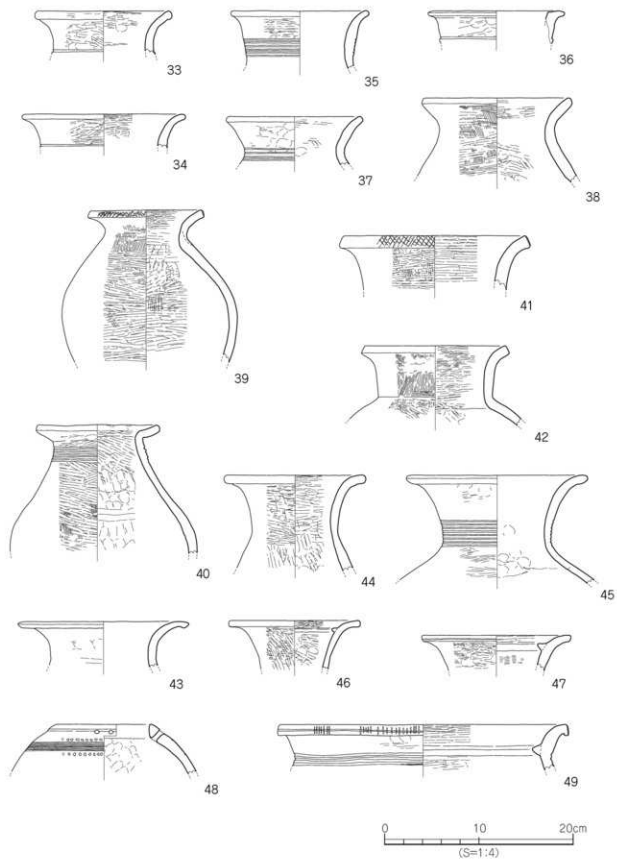
第 11 図 SD1 下層出土遺物実測図 (1)



第 12 図 SD1 下層出土遺物実測図 (2)



第 13 図 SD1 下層出土遺物実測図 (3)



第 14 図 SD1 下層出土遺物実測図 (4)

50～56は頸部。50はヘラ描き沈線文7条と沈線文上方に刺突文が描かれている。51には、ヘラ描き沈線文2条と沈線文間に刺突文を施す。52は断面三角形の凸帯2条を貼付け、凸帯上に刻目を施す。53は、ヘラ描き沈線文2条を施す、なお、52・53の内外面には少量の赤色塗彩がみられる。54・55は貝殻施文土器。貝殻腹縁による斜格子目文と、54は櫛描き沈線文4条が描かれている。56は、ヨコ方向の櫛描き沈線文と斜格子目文を施す。器表面の調整は、内外面にヘラミガキを施すもの2点(50・52)、外面のみヘラミガキを施すもの3点(51・55・56)がある。

57～63は肩部～胴部片。58は多重の櫛描き沈線文(2段)、59はヘラ描き沈線文4条を施す。60は断面三角形の凸帯2条を貼付け、凸帯上に押圧を加える。61は肩部と胴部にヘラ描き沈線文、胴部中位には断面三角形の凸帯を貼付け、凸帯上に刻目を施す。62は口径54.0cmの大型品。口縁部にはヘラ描き沈線文1条と刻目、頸部にはヘラ描き沈線文3条を施す。口縁部内面には、断面三角形の凸帯を貼付ける。63は大型品の胴部で、62と63は同一個体である。胴部中位に断面方形の凸帯を貼付け、凸帯上にヘラ描き沈線文4条とタテ方向の沈線文32条(16条1組)が描かれている。器表面の調整は、内外面共にヘラミガキを施すもの4点(57～59・63)、外面にヘラミガキを施すもの1点(61)がある。

64～75は底部。64～68は僅かに上げ底、69は平底、70～73は突出部をもつ底部である。なお、58と64は同一個体である。74・75は大型品で、僅かに上げ底をなす。74は62・63と同一個体である。器表面の調整は、内外面共にヘラミガキを施すもの3点(66・71・73)、外面のみヘラミガキを施すもの6点(64・68・69・70・72・75)、外面にハケメ調整がみられるもの2点(65・67)がある。なお、壺形土器には甕形土器と同様、胎土中には石英や長石、金ウンモが含まれているが、68には少量の赤色酸化土粒が含まれている。

76は甕形土器。甕形土器の蓋で、つまみ端部は外方に肥厚し、上端部は平坦である。内外面には、ハケメ調整がみられる。77はミニチュア品で、甕形土器の模倣品である。78～80は土製の紡錘車。胴部の転用品で、78は径0.2cm大の孔を穿つ。79・80は、片面に孔の痕跡が残る。

縄文土器(81～83)

81・82は深鉢。口縁部は外反気味に立ち上がり、81は口唇部に刻目、口唇部より下がった位置に断面三角形の凸帯を貼付け、凸帯上に刻目を施す。口縁部外面には、ヘラ描きの斜線文が描かれている。器表面の調整は、口縁部外面に貝殻条痕がみられる。82は、口唇部に刻目を施す。83は浅鉢で、口縁部は鍵状をなす。

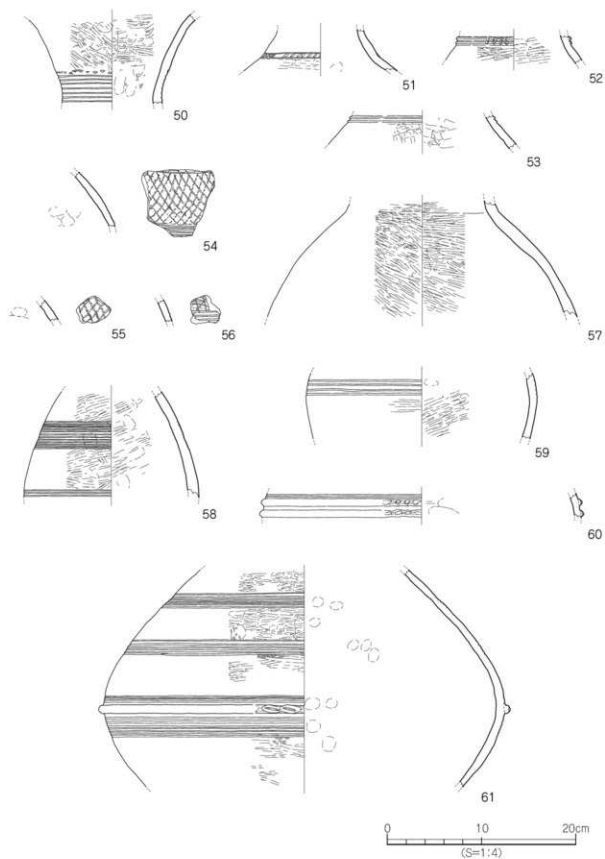
石器(84～86)

84は伐採斧の破損品。結晶片岩製、85は砂岩製の台石で、上面部は凹む。86は凹基無茎式石鏃で、石材はサヌカイトである。

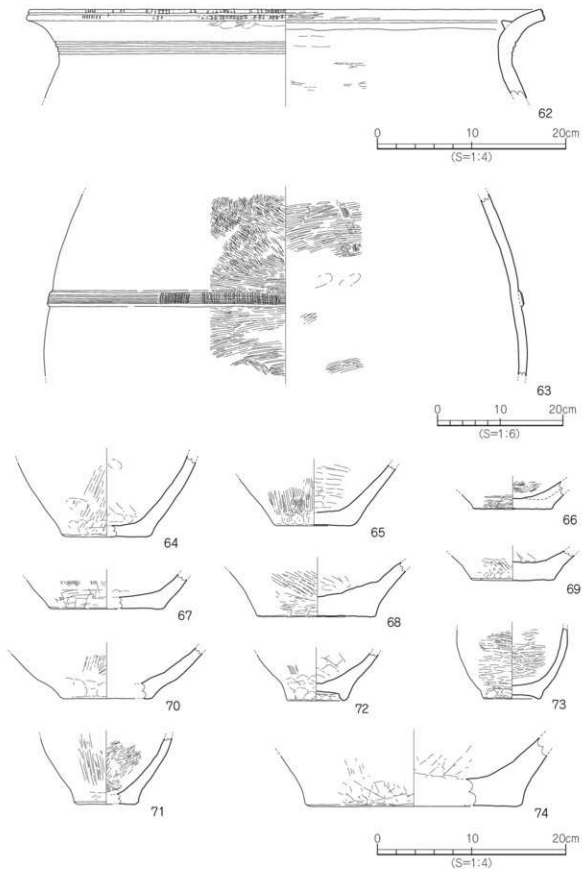
② 中層出土遺物(第18・19図、図版9・10)

弥生土器(87～107)

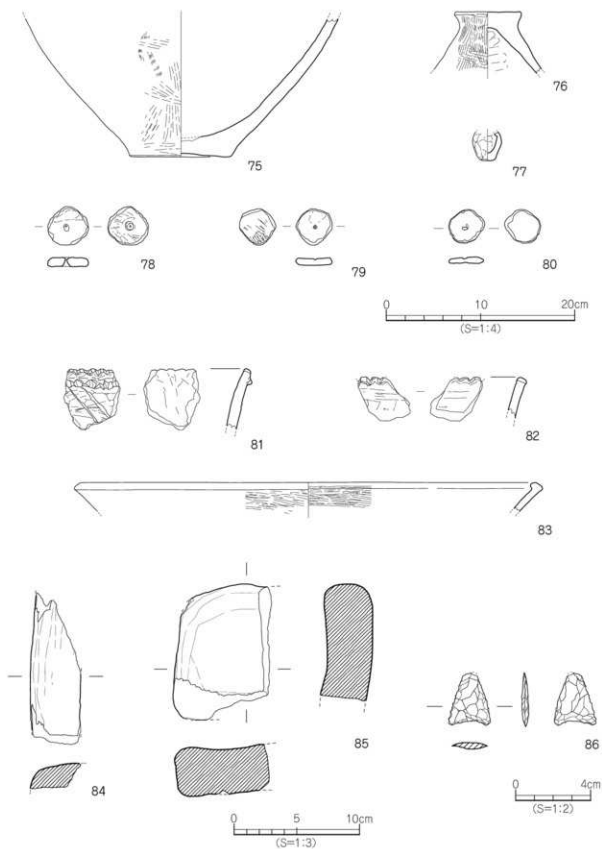
87・88は折曲、89～92は貼付により口縁部を成形する甕形土器。88は口縁端部に刻目、胴部外面には櫛描き沈線文8条を施す。89・90は口縁端部に刻目、胴部外面に櫛描き沈線文と刺突文を施す。91は胴部外面に櫛描き沈線文と沈線文間に山形文、沈線文下に刺突文を施す。92は口唇部より下がっ



第 15 図 SD1 下層出土遺物実測図 (5)



第 16 図 SD1 下層出土遺物実測図 (6)



第 17 図 SD1 下層出土遺物実測図 (7)

た位置に断面三角形の凸帯を貼付け、凸帯上に刻目を施す。93は口径40cmを超える大型品で、折曲により口縁を成形する。器表面の調整は、胴部内外面にヘラミガキを施すもの3点(88・89・93)、外面のみにヘラミガキを施すもの1点(91)、内面のみにヘラミガキを施すもの3点(87・90・92)がある。胎土中には石英や金ウンモのほか、赤色酸化土粒を含むもの2点(88・91)や角閃石を含むもの1点(92)がある。94～98は底部で、94～96は僅かに上げ底をなす。97・98は、くびれをもつ上げ底である。97・98は、弥生時代中期後半に時期比定される。

99～103は壺形土器。99は口縁部が大きく外反し、口縁端部に刻目を施す。100は短頸壺で、口縁端部に刻目を施す。内外面には、丁寧なヘラミガキを施す。101は長頸壺の頸部に付く把手で、径0.3cm大の孔を二箇所に穿つ。102は頸～肩部片で、頸部にはヘラ描き沈線文4条を施す。103は胴部片で、ヘラ描き沈線文3条と断面三角形の凸帯を貼付け、凸帯上には刻目文2列(連鎖状刻目文と呼称)を施す。

104は鉢形土器。口縁部は内湾し、口縁端部は上方にやや肥厚する。体部内外面には、丁寧なヘラミガキを施す。弥生時代中期後半。105は高坏形土器。坏部片で、坏部下位は稜をなし、口縁部は大きく外反する。弥生時代後期後半。

106・107はミニチュア品。甕形土器の模倣品で、106は上げ底をなす。

縄文土器(108)

108は縄文時代晩期後半の浅鉢。口縁部は内方に肥厚する。

石器(109～113)

109は磨製の石庖丁。平面形態は楕円形をなし、両面穿孔である。緑色片岩製。110は緑色片岩製の石鎌、111は砂岩製の両刃石斧である。112は砂岩製の敲石で、上部が凹む。113はスクレイパー。赤色チャート製。

③ ベルト・トレンチ出土遺物(第20図、図版10)

弥生土器

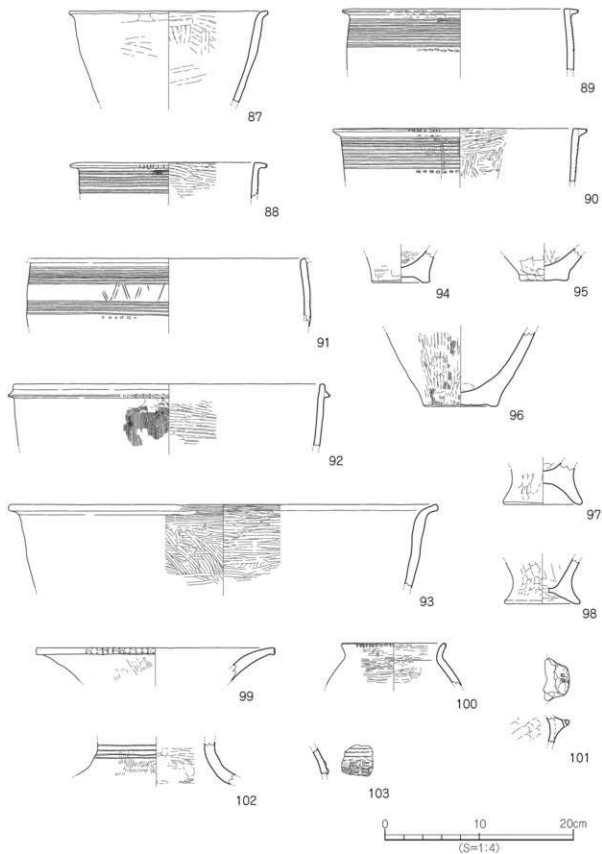
114は折曲により口縁部を成形する甕形土器で、胴部外面に櫛描き沈線文11条と竹管文を施す。口縁部外面はヘラミガキ、胴部内外面にはハケメ調整後、ヘラミガキを施す。115は貼付により口縁部を成形する甕形土器。口縁端部に刻目、胴部外面には櫛描き沈線文3条を施す。胴部外面はハケメ調整、内面には全面にヘラミガキを施す。116は底部片で、僅かに上げ底をなす。117・118は壺形土器。117は口径55.0cmを超える大型品で、口縁端部にヘラ描き沈線文3条とタテ方向の沈線文15条を施す。頸部には、ヘラ描き沈線文2条が描かれている。内外面共に、ヨコ方向のヘラミガキを施す。118は肩～胴部片。肩部にはヘラ描き沈線文1条と刺突文を施す。119は土製の紡錘車。転用品。

縄文土器

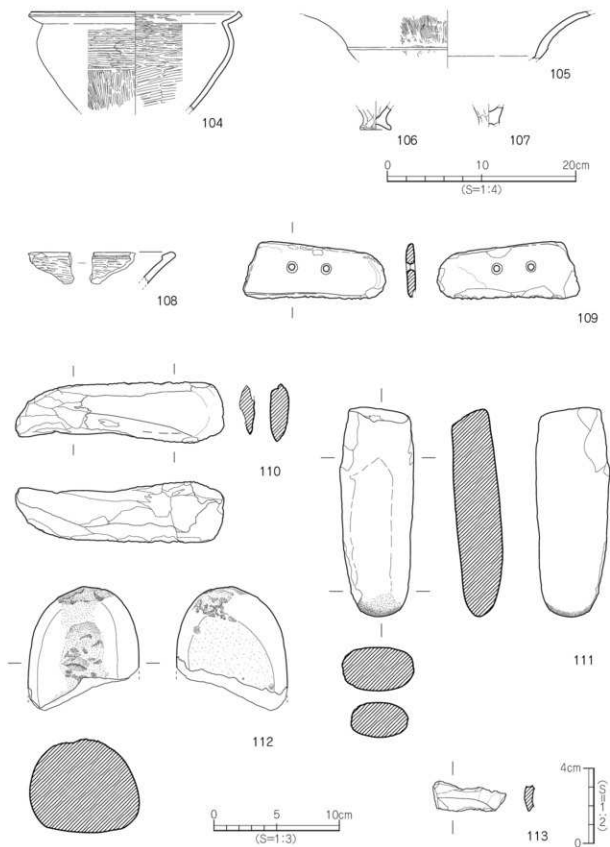
120は縄文時代晩期後半の浅鉢。口縁部内面に沈線1条が巡り、内外面にはヘラミガキを施す。

石器

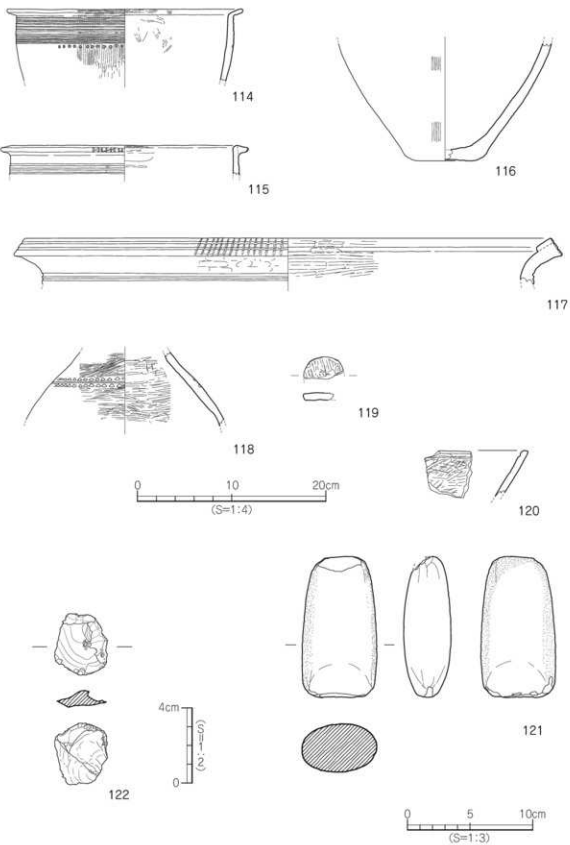
121は磨製の伐採斧。使用により、刃部は丸みを帯びている。玄武岩製。122はスクレイパーで、石材は黒曜石である。



第 18 図 SD1 中層出土遺物実測図 (1)



第 19 図 SD1 中層出土遺物実測図 (2)

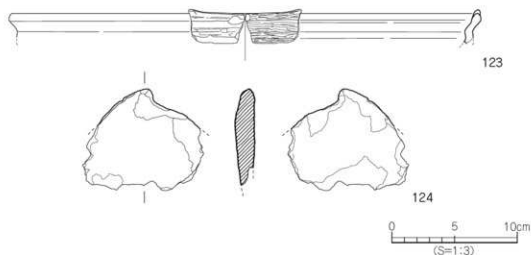


第20図 SD1 ベルト・トレンチ出土遺物実測図

④ 地点不明出土遺物 (第 21 図、図版 10)

123 は縄文時代晩期後半の浅鉢で、鍵状の口縁部をもつ。124 は、安山岩裂の大型剥片である。

時期: 出土した弥生土器の特徴より、SD1 は弥生時代前期末から中期初頭の溝と考えられる。なお、土層の堆積状況と遺物の出土状況から土器や石器を廃棄し、人為的に埋め戻されたものと推測される。



第 21 図 SD1 地点不明出土遺物実測図

SD15 (第 9・22 図、図版 3)

調査区南東部 A5・6 区で検出した東西方向の溝で、溝西端は消滅し、東端は調査区外へ続く。なお、溝上面は土坑 SK2 と 2 基の柱穴 (SP21・31) に一部削平されている。溝の規模は検出長 6.20m、幅 18 ~ 28cm、深さは 10cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は第Ⅲ層と同様の黒褐色粘質土 (7.5YR 3/2) 単層である。溝基底面には僅かに凹凸があり、東から西へ向けて緩やかな傾斜をなす (比高差 3cm)。溝からは、遺物の出土はない。

時期: 出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SK2 (弥生時代中期後半) に先行することや埋土などから、概ね弥生時代中期後半以前の溝とする。



第 22 図 SD15 断面図

SD2 (第 8・23 図)

調査区北西部 C2 区で検出した北東-南西方向の溝で、溝両端は調査区外へ続く。溝 SD1 と重複し、SD2 が後出する。また、溝上面は一部、SD3 に削平されている。溝の規模は検出長 7.00m、幅 60 ~ 80cm、深さは検出面下 1.0m である。断面形態は「U」字状をなし、埋土は暗褐色粘質土 (7.5YR 3/3) に明褐色粘質土 (7.5YR 5/6) がブロック状に少量混入するものである。溝基底面には凹凸はなく、北側から南側へ向けて緩やかな傾斜をなす (比高差 5cm)。遺物は埋土中より、弥生土器小片が数点出土した。

出土遺物

125・126は壺形土器。125は逆「L」字状に折れ曲がる口縁部で、胴部に断面三角形の凸帯を貼付け、凸帯上に刻目を施す。126は折曲げにより口縁部を成形し、胴部に櫛描き沈線文5条を施す。127は壺形土器の胴部片。凸帯を貼付け、凸帯上に沈線文1条が巡る。128は壺形土器の底部で、中央部が凹む。129は壺形土器の底部で、厚みのある平底である。

時期：溝からは弥生土器片が出土しているが、検出層位や埋土などからSD2は近現代の溝と考えられる。

SD3 (第8・24図)

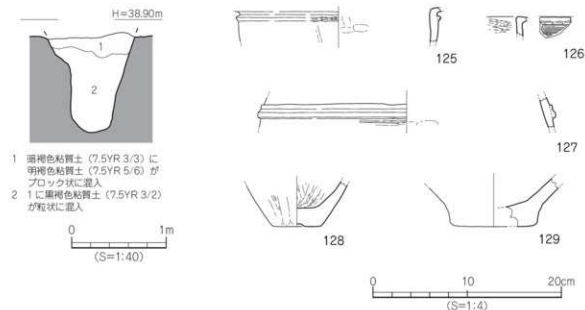
調査区西部B・C2区で検出した南北方向の溝で、溝南側は消滅し、北側は調査区外に続く。溝北側はSD2と重複し、SD3が後出する。溝の規模は検出長5.70m、幅30～50cm、深さは22cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は第Ⅱ層と同様の暗褐色粘質土(7.5YR 3/3)単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、第Ⅱ層で埋没することから、SD3は近現代の溝とする。

SD4 (第8・24図、図版2)

調査区西部B2～C3区で検出した南北方向の溝で、溝南側は消滅し、北側は調査区外に続く。溝の規模は検出長5.40m、幅30～36cm、深さは16cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は第Ⅱ層と同様の暗褐色粘質土(7.5YR 3/3)単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SD3と同様、近現代の溝とする。



第23図 SD2断面図・出土遺物実測図

SD5 (第 8・24 図、図版 2)

調査区西部 B2～C3 区で検出した南北方向の溝で、溝南側は消滅し、北側は調査区外に続く。溝の規模は検出長 4.90m、幅 30～40cm、深さは 7cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は第 II 層と同様の暗褐色粘質土 (7.5YR 3/3) 単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは弥生土器片が数点出土したが、本来は SD1 に伴う遺物と考えられる。

出土遺物 (第 25 図、図版 11)

130 は弥生時代前期末の甕形土器。折曲により口縁部を成形し、口縁上端部に刻目、胴部にヘラ描き沈線文 8 条と刺突文を施す。

時期：検出層位や埋土より、SD5 は近現代の溝とする。

SD6 (第 8・24 図、図版 2)

調査区西部 B2～C3 区で検出した南北方向の溝で、溝南側は消滅し、北側は調査区外に続く。溝の規模は検出長 6.00m、幅 30～48cm、深さは 12cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は第 II 層と同様の暗褐色粘質土 (7.5YR 3/3) 単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土より、SD6 は近現代の溝とする。

SD7 (第 8・24 図)

調査区中央部西寄り B・C3 区で検出した南北方向の溝で、溝両端は消滅している。溝の規模は検出長 5.40m、幅 10～22cm、深さは 4cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は第 II 層と同様の暗褐色粘質土 (7.5YR 3/3) 単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土より、SD7 は近現代の溝とする。

SD8 (第 8・24 図)

調査区中央部西寄り B・C3 区で検出した南北方向の溝で、溝南側は消失し、北側は調査区外に続く。一部、溝 SD16 と重複している (先後関係は不明)。溝の規模は検出長 5.90m、幅 30～38cm、深さは 17cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は第 II 層と同様の暗褐色粘質土 (7.5YR 3/3) 単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土より、SD8 は近現代の溝とする。

SD9 (第 8・24 図)

調査区中央部 B・C4 区で検出した南北方向の溝で、溝南側は消滅し、北側は調査区外に続く。溝の規模は検出長 4.08m、幅 33～42cm、深さは 16cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は第 II 層と同様の暗褐色粘質土 (7.5YR 3/3) 単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは、近現代の陶磁器片が数点出土した。

時期：出土遺物の特徴より、SD9 は近現代の溝と考えられる。

SD10 (第8・24図)

調査区中央部 A4～C4区で検出した南北方向の溝で、溝南側及び中央部は消滅し、北側は調査区外に続く。溝の規模は検出長6.50m、幅30～38cm、深さは18cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は第Ⅱ層と同様の暗褐色粘質土(7.5YR 3/3)単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは、近現代の陶磁器片が数点出土した。

時期：出土遺物の特徴より、SD10は近現代の溝と考えられる。

SD11 (第8・24図)

調査区東部 A4・5区で検出した南北方向の溝で、溝北端は消滅し、南側は調査区外に続く。溝の規模は検出長1.70m、幅36～40cm、深さは12cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は第Ⅱ層と同様の暗褐色粘質土(7.5YR 3/3)単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは、弥生土器片や須恵器片が数点出土した。

出土遺物 (第25図、図版11)

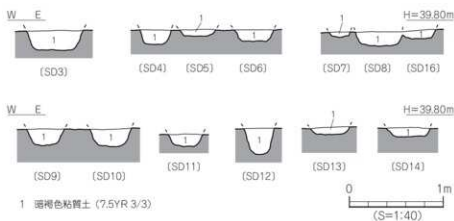
131は弥生時代前期末の甕形土器。底部片で、平底をなす。132は須恵器壺の肩部片。外面は平行叩き後、回転カキメ調整、内面には円弧叩きが残る。

時期：検出層位や埋土より、SD11は近現代の溝と考えられる。

SD12 (第8・24図)

調査区東部 A・B5区で検出した南北方向の溝で、溝両端は消滅している。溝の規模は検出長5.16m、幅20～30cm、深さは32cmである。断面形態は深さのあるレンズ状をなし、埋土は第Ⅱ層と同様の暗褐色粘質土(7.5YR 3/3)単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土より、SD12は近現代の溝とする。



第24図 SD3～14・16 断面図

SD13 (第 8・24 図)

調査区東部 A・B5 区で検出した南北方向の溝で、溝中央部は一部消失し、両端は調査区外へ続く。溝の規模は検出長 7.25m、幅 20～32cm、深さは 6cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は第 II 層と同様の暗褐色粘質土 (7.5YR 3/3) 単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土より、SD13 は近現代の溝とする。

SD14 (第 8・24 図)

調査区東部 A・B5 区で検出した南北方向の溝で、溝北側は消失し、南側は調査区外へ続く。溝の規模は検出長 5.40m、幅 38～42cm、深さは 10cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は第 II 層と同様の暗褐色粘質土 (7.5YR 3/3) 単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：検出層位や埋土より、SD14 は近現代の溝とする。

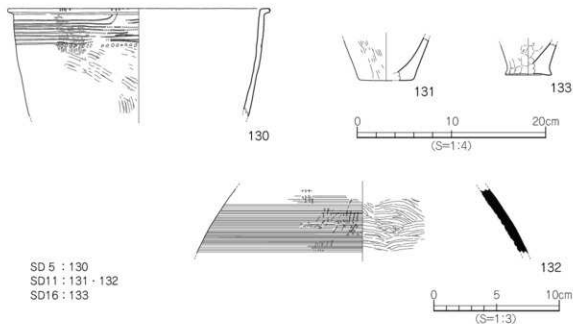
SD16 (第 8・24 図)

調査区中央部西寄り B3～C4 区で検出した南北方向の溝で、溝南端は消滅し、北側は調査区外へ続く。溝の規模は検出長 6.50m、幅 30～36cm、深さは 8cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は第 II 層と同様の暗褐色粘質土 (7.5YR 3/3) 単層である。溝基底面には僅かに凹凸がみられるが、基底面の比高差はない。遺物は弥生土器片が数点出土したが、本来は SD1 に伴う遺物と考えられる。

出土遺物 (第 25 図)

133 は弥生時代前期末の甕形土器。突出部をもつ上げ底で、底部外面には指頭痕が顕著に残る。

時期：検出層位や埋土より、SD16 は近現代の溝とする。



第 25 図 SD5・11・16 出土遺物実測図

2. 土 坑

調査では、3基の土坑を検出した。すべて、弥生時代の遺構である。

SK1 (第26図、図版4)

調査区北西隅C2区で検出した土坑で、西半部は調査区外へ続く。平面形態は円形をなすものと思われる、規模は南北検出長1.92m、東西検出長1.00m、深さは10cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色粘質土(7.5YR 3/2)に明褐色粘質土(7.5YR 5/6)がブロック状に少量混入するものである。土坑基底面は平坦であるが、基底面に2基の柱穴(SP7・8)を検出した。両者共に、埋土は黒褐色粘質土(7.5YR 3/2)単層である。遺物は埋土中より、弥生土器小片が数点出土した。

出土遺物(図版11)

134は甕形土器。胴部片で、櫛掻き沈線文4条と刺突文を施す。内外面共に、丁寧なヘラミガキがみられる。

時期：出土遺物の特徴より、SK1は弥生時代前期末から中期初頭の土坑と考えられる。

SK2 (第27図、図版3)

調査区南東隅A5・6区で検出した土坑で、溝SD1・SD15と重複し、SK2が後出する。平面形態は楕円形をなし、規模は長径0.78m、短径0.70m、深さは30cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色粘質土(7.5YR 3/2)に明褐色粘質土(7.5YR 5/6)がブロック状に少量混入するものである。土坑基底面には、凹凸は見られない。遺物は埋土中より、弥生土器小片が数点出土した。

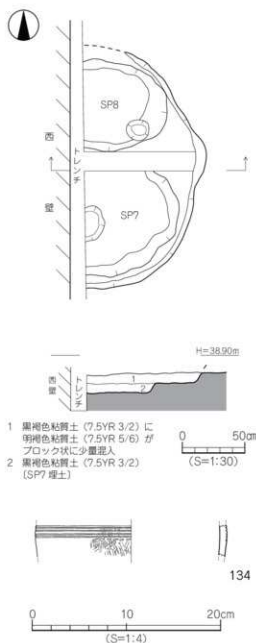
出土遺物

135は甕形土器。僅かに上げ底をなし、外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。

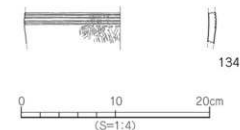
時期：出土遺物の特徴より、SK2は弥生時代前期末から中期初頭の土坑と考えられる。

SK3 (第28図)

調査区北西部C2区で検出した土坑で、平面形態は不整の楕円形をなし、規模は長径1.12m、短径0.50m、深さは8cmである。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は黒褐色粘質土(7.5YR 3/2)に明



- 1 黒褐色粘質土(7.5YR 3/2)に明褐色粘質土(7.5YR 5/6)がブロック状に少量混入
 - 2 黒褐色粘質土(7.5YR 3/2) (SP7埋土)
- 0 50cm (S=1:30)



第26図 SK1測量図・出土遺物実測図

褐色粘質土(7.5YR 5/6)がブロック状に少量混入するものである。土坑基底面には、凹凸は見られない。遺物は埋土中より、弥生土器小片が数点出土した。

出土遺物

136は甕形土器。くびれをもつ上げ底で、色調は内外面共に橙色である。

時期：出土遺物の特徴より、SK3は弥生時代中期後半の土坑と考えられる。

3. その他の遺構と遺物

調査では柱穴 37 基を検出したほか、第三層中より遺物が比較的数量多く出土した。

① 柱 穴 (図版 4)

検出した 37 基の柱穴は、掘り方埋土で分類すると以下の 4 種類(埋土①～④)に分けられる。

埋土①：黒褐色粘質土 (7.5YR 3/2)

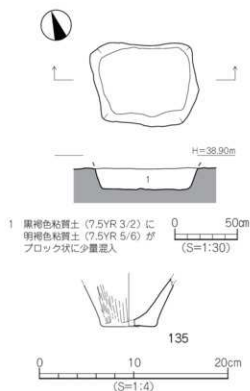
埋土②：黒褐色粘質土 (7.5YR 3/2) に明褐色粘質土 (7.5YR 5/6) がブロック状に混入

埋土③：黒褐色粘質土 (10YR 2/3)

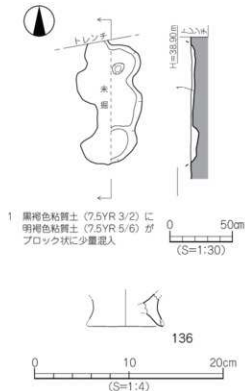
埋土④：黒褐色粘質土 (10YR 2/3) に明褐色粘質土 (7.5YR 5/6) がブロック状に混入

各埋土の柱穴は埋土①：10基 (SP7・8・12・14・18・19・20・26・28・29)、埋土②：9基 (SP1・2・3・9・13・16・17・34・37)、埋土③：2基 (SP23・24)、埋土④：16基 (SP4・5・6・10・11・15・21・22・25・27・30・31・32・33・35・36) となる。

各柱穴からは遺物の出土がないが、柱穴掘り方埋土が第三層に酷似することから、概ね弥生時代以降に掘削された柱穴と推測される。



第 27 図 SK2 測量図・出土遺物実測図



第 28 図 SK3 測量図・出土遺物実測図

② 包含層出土遺物

調査では、第Ⅲ層中より縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

第Ⅲ層出土遺物（第29図、図版11）

137・138は壺形土器。137は弥生時代中期中葉の広口壺で、口縁部は外反し、口縁端部は上下方へ僅かに肥厚する。内外面には、丁寧なヘラミガキを施す。138は弥生時代前期末の胴部片で、櫛描きの弧文が描かれている。139は弥生時代中期後半の鉢形土器。口縁部の小片で、沈線文3条と貝殻腹縁による列点文を施す。140は土製の紡錘車。胴部の転用品で、径0.5cm大の孔を両面から穿つ。内外面にはヘラミガキが施され、胎土中には赤色酸化土粒が少量含まれている。141・142は古墳時代の土師器甕。141の口縁部は外反し、口縁端部は消失している。142の口縁部はやや内湾し、口縁端部は内傾する。143・144は土師器の高坏。143の坏部は椀形をなし、口縁部は僅かに外反する。脚柱部は中実で、外面には面取りの痕跡が看守される。部分的に赤色塗彩が残る。飛鳥時代。144は脚部で、柱部は面取りされ、部分的に赤色塗彩が残る。奈良時代。145は古墳時代の須恵器壺。頸～胴部片で、外面には平行叩き後、ヨコ方向のハケメを施し、内面には円弧叩きが残る。146は縄文時代晩期後半の深鉢。口縁部の小片で、口唇部に刻目をもつ。

第4節 小 結

調査では、縄文時代から近現代の遺構・遺物を確認した。ここでは、時代別に概要を説明する。

1. 縄文時代

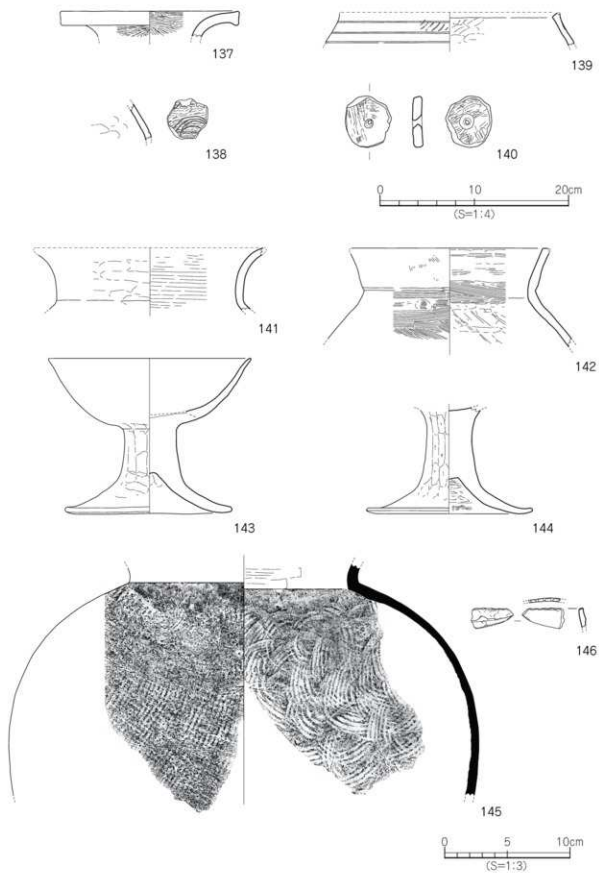
縄文時代の遺構は未検出であるが、弥生時代の溝SD1や第Ⅲ層中より晩期に時期比定される土器片が数点出土した。刻目をもつ凸帯が貼り付けられた深鉢の口縁部片や、内面に沈線を施した浅鉢の口縁部片などが出土している。いずれも晩期後半に時期比定される土器であるが、調査地の所在する来台台地上では該期の遺構・遺物が散見されている。ただし、集落様相や範囲については定かではなく、今後の課題といえる。

2. 弥生時代

弥生時代の遺構は、溝2条と土坑3基が挙げられる。このうち、溝SD1は最大幅4.6m、深さ1.1mの大型溝で、溝からは弥生時代前期末から中期初頭に時期比定される土器片や石器が大量に出土した。土器には完形品が少なく、大半は破片ばかりである。溝の断面形態は「U」字状をなすが、壁体は比較的直立気味に立ち上がる。溝基底面には凹凸がなく、ほぼ平坦であり、比高差は認められない。

来台台地上では、該期の大溝が久米高畑遺跡23次調査（平成6年度調査）や同25次調査（平成7年度調査）で発見されている。特に25次調査では併走する2条の溝が検出され、そのひとつが23次調査で検出されている。また、久米高畑遺跡28・29次調査（平成8年度調査）からも同時期の大溝が検出されている（第46図）。これらの溝は溝幅3m以上、深さ1m以上の大溝で、溝からは弥生時代前期末から中期初頭に時期比定される土器や石器が大量に出土している。これら溝の配置や埋土、断面形状などから、本調査検出の溝SD1は久米高畑遺跡25次調査検出の溝SD2と同一の溝である可能性が高いと考えられる。

このほか、SD15は弥生時代中期後半以前、3基の土坑はSK1・2が前期末～中期初頭、SK3は中



第 29 図 第Ⅲ層出土遺物実測図

期後半期の遺構である。これらは、調査地近隣に所在する該期集落に関連する遺構と考えられる。

3. 古墳時代～古代

古墳時代から古代の遺構は未検出であるが、近現代の溝や第Ⅲ層掘り下げ時に該期の遺物が出土した。特に、第Ⅲ層中からは古墳時代の土師器や須恵器のほか、飛鳥時代や奈良時代に時期比定される土器が出土している。

4. 近現代

近現代では、第Ⅱ層下にて溝 14 条 (SD2～14・16) を検出した。これらは検出状況より畝耕作に伴う畝溝と考えられる。畝溝は南北方向と東西方向に掘削され、溝幅 10～80cm、深さは検出面下 4～100cm である。溝内からは、大正時代から昭和時代の陶磁器片が数点出土している。

松山平野内では、平野中央部の岩崎遺跡 (平成 8・9 年度調査) や平野西部の斎院烏山遺跡 (昭和 59 年度調査) でも弥生時代前期の大溝が発見されており、今回の成果は松山平野における弥生前期集落の構造を解明するうえで、貴重な追加資料となる。

【参考文献】

- 橋本 雄一 1995 「久米高畑遺跡 23 次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ
 高尾 和長 2003 「久米高畑遺跡 - 25 次調査 -」松山市文化財調査報告書第 93 集
 橋本 雄一 1997 「久米高畑遺跡 28 次・29 次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ
 西尾 幸則 1994 「斎院烏山遺跡」『斎院の遺跡』松山市文化財調査報告書第 43 集
 宮内 慎一 1999 「岩崎遺跡」松山市文化財調査報告書第 71 集

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

地区欄	グリッド名を記載。
規模欄	() は現存値を示す。
埋土欄	複数の土層がある場合は、以下のように記載している。 例) 「黒褐色粘質土 他」
出土遺物欄	遺物名称を略記した。 例) 縄→縄文土器、弥→弥生土器、土→土師器、須→須恵器、陶→陶磁器、石→石製品

(2) 遺物観察表

法量欄	() : 復元推定値
胎土欄	胎土欄は混和剤を略記した。 例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ () 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。 例) 石・長 (1～2) → 「1～2mm 大の石英・長石を含む」である。
焼成欄	焼成欄の略記について ◎→良好

表 2 溝一覧

溝 (S D)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A3～C4	東西	「U」字状	(2300) × 3.70～4.60 × 1.10	黒褐色粘質土 他	縄・弥・土・須・石	弥生時代前期～中期初頭	
2	C2	北東～南西	「U」字状	(7.00) × 0.60～0.80 × 1.00	暗褐色粘質土 (明褐色粘質土がブロック状に混入)	弥	近現代	SD3 と重複
3	B-C2	南北	レンズ状	(5.70) × 0.30～0.50 × 0.22	暗褐色粘質土		近現代	SD2 と重複
4	B2～C3	南北	レンズ状	(5.40) × 0.30～0.36 × 0.16	暗褐色粘質土		近現代	
5	B2～C3	南北	レンズ状	(4.90) × 0.30～0.40 × 0.07	暗褐色粘質土	弥	近現代	
6	B2～C3	南北	レンズ状	(6.00) × 0.30～0.48 × 0.12	暗褐色粘質土		近現代	
7	B-C3	南北	レンズ状	(5.40) × 0.10～0.22 × 0.04	暗褐色粘質土		近現代	
8	B-C3	南北	レンズ状	(5.90) × 0.30～0.38 × 0.17	暗褐色粘質土		近現代	SD16 と重複
9	B-C4	南北	レンズ状	(4.08) × 0.33～0.42 × 0.16	暗褐色粘質土	陶	近現代	
10	A4～C4	南北	レンズ状	(6.50) × 0.30～0.38 × 0.18	暗褐色粘質土	陶	近現代	
11	A4-5	南北	レンズ状	(1.70) × 0.36～0.40 × 0.12	暗褐色粘質土	弥・須	近現代	
12	A-B5	南北	レンズ状	(5.16) × 0.20～0.30 × 0.32	暗褐色粘質土		近現代	
13	A-B5	南北	レンズ状	(7.25) × 0.20～0.32 × 0.06	暗褐色粘質土		近現代	
14	A-B5	南北	レンズ状	(5.40) × 0.38～0.42 × 0.10	暗褐色粘質土		近現代	
15	A5-6	東西	レンズ状	(6.20) × 0.18～0.28 × 0.10	黒褐色粘質土		弥生時代中期後半以前	
16	B3～C4	南北	レンズ状	(6.50) × 0.30～0.36 × 0.08	暗褐色粘質土	弥	近現代	SD8 と重複

表 3 土坑一覧

土坑 (S K)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C2	(円形)	逆台形状	(1.92) × (1.00) × 0.10	黒褐色粘質土 (明褐色粘質土がブロック状に混入)	弥	弥生時代前期末～中期初頭	
2	A5-6	楕円形	逆台形状	0.78 × 0.70 × 0.30	黒褐色粘質土 (明褐色粘質土がブロック状に混入)	弥	弥生時代前期末～中期初頭	SD15 と重複
3	C2	不整形円形	逆台形状	1.12 × 0.50 × 0.08	黒褐色粘質土 (明褐色粘質土がブロック状に混入)	弥	弥生時代中期後半	

表 4 柱穴一覧

(1)

柱穴 (S P)	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
1	C3	円形	0.20 × 0.19 × 0.10	埋土②		
2	C2	楕円形	0.58 × 0.40 × 0.28	埋土②		
3	A5	楕円形	0.30 × 0.22 × 0.12	埋土②		
4	B2	楕円形	0.32 × 0.23 × 0.11	埋土④		
5	B2	円形	0.40 × 0.38 × 0.20	埋土④		
6	B2	楕円形	0.60 × 0.48 × 0.22	埋土④		SP10 と重複
7	C2	(円形)	(0.91) × (0.85) × 0.11	埋土①		SK1 内検出、柱痕
8	C2	(楕円形)	(0.84) × (0.82) × 0.13	埋土①		SK1 内検出
9	A4-5	楕円形	0.49 × 0.38 × 0.21	埋土②		
10	B2	楕円形	0.40 × 0.26 × 0.10	埋土④		SP6 と重複

遺物観察表

(2)

柱穴一覧						
柱穴 (SP)	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
11	C2	楕円形	0.30 × 0.28 × 0.18	埋土④		
12	C2	円形	0.18 × 0.18 × 0.08	埋土①		
13	A4	楕円形	0.46 × 0.32 × 0.22	埋土②		
14	A・B4	(楕円形)	0.60 × 0.46 × 0.25	埋土①		SP19と重複
15	C3	楕円形	0.31 × 0.20 × 0.23	埋土④		
16	A4	楕円形	0.30 × 0.22 × 0.11	埋土②		SP37と重複
17	A4	不整形円形	0.70 × 0.62 × 0.30	埋土②		
18	C3	円形	0.32 × 0.30 × 0.22	埋土①		
19	A・B4	(円形)	0.55 × 0.48 × 0.26	埋土①		SP14と重複
20	B3	楕円形	0.30 × 0.16 × 0.08	埋土①		
21	A5	長楕円形	0.40 × 0.18 × 0.08	埋土④		
22	B4	円形	0.20 × 0.18 × 0.10	埋土④		
23	C3-4	(円形)	0.70 × 0.34 × 0.11	埋土③		SD1に先行
24	B3	不整形円形	0.42 × 0.42 × 0.19	埋土③		
25	B3	楕円形	0.16 × 0.10 × 0.07	埋土④		
26	B3	円形	0.22 × 0.21 × 0.12	埋土①		
27	B4	不整形円形	0.36 × 0.32 × 0.09	埋土④		
28	C3	円形	0.22 × 0.22 × 0.10	埋土①		
29	B4	円形	0.17 × 0.17 × 0.10	埋土①		
30	B5	円形	0.23 × 0.21 × 0.08	埋土④		
31	A5	円形	0.80 × 0.68 × 0.25	埋土④		SD15より残出、柱痕
32	A5	楕円形	0.45 × 0.35 × 0.22	埋土④		
33	B4	円形	0.32 × 0.31 × 0.17	埋土④		柱痕
34	A5	(円形)	0.89 × 0.52 × 0.21	埋土②		柱痕
35	B3	円形	0.23 × 0.23 × 0.10	埋土④		
36	B3	楕円形	0.60 × 0.38 × 0.17	埋土④		
37	A・B4	楕円形	0.70 × 0.45 × 0.21	埋土⑤		SP16と重複

表5 SD1下層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	甕	口径 (190) 底径 67 器高 200	折曲口縁。底部はやや上げ底。口縁部は僅かに波状をなす。無文。	①ヨコナデ 器ハケ(6本/cm) →ヘラムイガキ	ヘラムイガキ	橙色 橙色	石・長 (1~3) ○	黒埋	5
2	甕	口径 (182) 残高 67	折曲口縁。口縁端部に刻目、胴部外面に柳掻き沈線文11条と刺突文あり。1/5の残存。	①ヨコナデ 器ハケ(6本/cm) →ヘラムイガキ	ヘラムイガキ ナデ	黒褐色 灰褐色	石・長 (1~3) ○		5
3	甕	口径 (216) 残高 76	折曲口縁。口縁端部に刻目あり。小片。	①ヨコナデ 器マメツ	①ヨコナデ 器マメツ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~3) 赤色酸化土粒 ○		
4	甕	口径 (221) 残高 178	折曲口縁。口縁端部に刻目あり。1/2の残存。	①ヨコナデ 器ヘラムイガキ	ヘラムイガキ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) ○	黒埋	
5	甕	口径 (208) 残高 77	折曲口縁。口縁上端部に刻目、胴部外面に柳掻き沈線文11条あり。	①マメツ 器ハケ→ナデ	ヘラムイガキ ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~5) ○		

SD1 下層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・論文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
6	甕	口径 (21.5) 残高 9.0	折曲口縁。口縁下部部に刻目、胴部外面に横置き沈線文2条と3条、沈線文間に刺突文あり。小片。	☐ヨコナデ 刷ヘラミガキ	ヘラミガキ ナデ	黒褐色 黒褐色	石・長 (1~3) 金 ○	黒斑	5
7	甕	口径 (27.0) 残高 14.3	折曲口縁。口縁端部に刻目あり。1/3の残存。	☐ヨコナデ 刷ハケ (6~7本/cm)	☐ハケ→ヘラミガキ 刷ヘラミガキ (指頭痕)	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~2) ○	窪付着	5
8	甕	口径 (27.2) 残高 12.9	折曲口縁。胴部外面にヘラ横置き沈線文8条あり。小片。	☐マメツ 刷ヘラミガキ	☐ヨコナデ 刷ナデ →ヘラミガキ	橙色 橙色	石・長 (1~3) ○		5
9	甕	残高 14.2	大型品。口縁部を一部欠損。胴部外面にヘラ横置き沈線文9条と刺突文あり。小片。	ハケ (8~9本/cm) →ナデ	ヘラミガキ ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~3) 金 ○		
10	甕	口径 (23.2) 残高 7.1	貼付口縁。無文。小片。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) 赤色酸化土粒 ○		
11	甕	口径 (20.2) 残高 8.3	貼付口縁。口縁端部に刻目、胴部外面に横置き沈線文5条 (3段) と、沈線文間に竹管文と半截竹管文あり。1/5の残存。	☐ヨコナデ 刷ハケ (7本/cm)	☐ヨコナデ 刷ヘラミガキ・ ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~3) 金 ○		5
12	甕	残高 3.9	貼付口縁。胴部外面に横置き沈線文4条 (2段) と山形文あり。小片。	☐ヨコナデ 刷ナデ	ヘラミガキ ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) 金 ○		5
13	甕	口径 (24.2) 残高 8.1	貼付口縁。口縁端部に刻目、胴部外面にヘラ横置き沈線文7条と刺突文あり。小片。	☐ヘラミガキ 刷ヘラミガキ →ナデ	ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) ○	黒斑	
14	甕	口径 (20.7) 残高 9.6	断面三角形形状の凸帯を貼付け、凸帯上と口唇部に刻目あり。口縁端部は内傾。1/6の残存。	☐ヨコナデ 刷ハケ (5~6本/cm) →ヘラミガキ	ヘラミガキ ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~4) 金 ○	窪付着	5
15	甕	口径 (41.9) 残高 7.5	大型品。貼付口縁。口縁端部に刻目、胴部外面にヘラ横置き沈線文8条と刺突文あり。小片。	マメツ	マメツ	黄灰色 黄灰色	石・長 (1~3) ○		
16	甕	口径 (41.2) 残高 17.4	大型品。貼付口縁。口縁端部に刻目、胴部外面にヘラ横置き沈線文6条・7条と沈線文間に刺突文あり。1/4の残存。	☐ヨコナデ 刷ヘラミガキ・ ナデ	☐ヘラミガキ・ ヨコナデ 刷ヘラミガキ・ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~3) ○		5
17	甕	底径 (7.7) 残高 9.6	僅かに上げ底。1/3の残存。	ヘラミガキ ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~4) ○	黒斑	6
18	甕	底径 (7.8) 残高 10.3	僅かに上げ底。1/2の残存。	ハケ (4本/cm)	ヘラミガキ ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ○	黒斑	6
19	甕	底径 (7.7) 残高 5.0	僅かに上げ底。底部完形品。	ヘラミガキ	ナデ (指頭痕)	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~5) ○	黒斑	
20	甕	底径 (8.6) 残高 4.5	僅かに上げ底。1/4の残存。	ハケ→ ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~5) ○	黒斑	
21	甕	底径 (9.6) 残高 4.8	僅かに上げ底。1/2の残存。	ハケ→ ヘラミガキ	ヘラミガキ ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~4) ○	黒斑	
22	甕	底径 8.7 残高 4.0	僅かに上げ底。1/2の残存。	ナデ	ナデ (指頭痕)	橙色 橙色	石・長 (1~2) ○		
23	甕	底径 9.0 残高 4.1	僅かに上げ底。1/2の残存。	ヘラミガキ	ナデ (指頭痕)	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~3) ○	黒斑	
24	甕	底径 (8.9) 残高 4.0	僅かに上げ底。1/4の残存。	ハケ (7~8本/cm) →ヘラミガキ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~4) ○	黒斑	
25	甕	底径 7.0 残高 10.9	突出部をもつ平底。底部完形品。	ハケ (6~7本/cm) →ヘラミガキ	マメツ	赤褐色 赤褐色	石・長 (1~4) ○		6
26	甕	底径 7.0 残高 7.6	突出部をもつ上げ底。底部完形品。	ハケ →ヘラミガキ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~3) ○		6
27	甕	底径 (9.5) 残高 5.6	厚みのある平底。2/3の残存。	ハケ (6本/cm) →ナデ	ヘラミガキ ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) ○		

遺物観察表

SD1 下層出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
28	甕	底径 6.8 残高 9.5	所謂コシキ形土器。僅かに上げ底。径 0.8cm 大の孔あり (焼成後穿孔)。底部定形品。	ヘラミガキ	マメツ	赤褐色 赤褐色	石・長 (1~3) ○	黒斑	6
29	甕	底径 7.4 残高 10.7	所謂コシキ形土器。底部は平底。径 1.0cm 大の孔あり (焼成後穿孔)。底部定形品。	ハケ →ヘラミガキ	マメツ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~3) ○		
30	甕	底径 6.9 残高 10.1	所謂コシキ形土器。厚みのある上げ底。径 1.3cm 大の孔あり (焼成後穿孔)。底部定形品。	ヘラミガキ →ナデ	ヘラミガキ →ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長 (1~3) ○	黒斑	6
31	甕	底径 (14.2) 残高 15.2	大型品。僅かに上げ底。1/2 の残存。	ヘラミガキ ナデ	ナデ	橙色 褐色	石・長 (1~3) ○		
32	鉢	口径 (32.0) 残高 12.5	大型品。折曲口縁。小片。	①マメツ ②ヨコナデ	①ヨコナデ ②ナデ (指頭痕)	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ○		
33	甕	口径 (13.6) 残高 4.5	短く外反する口縁部。頸部にヘラ描き沈線文あり。1/4 の残存。	①ヨコナデ ②ヘラミガキ・ハケ	ヘラミガキ →ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~4) 金		
34	甕	口径 (17.0) 残高 3.5	短く外反する口縁部。頸部にヘラ描き沈線文あり。小片。	①ヨコナデ ②ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) ○		
35	甕	口径 (14.0) 残高 6.1	短く外反する口縁部。頸部に髹描き沈線文 6 条あり。小片。	①マメツ ②ヘラミガキ →ナデ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~2) ○	黒斑	6
36	甕	口径 (13.0) 残高 2.4	短く外反する口縁部。頸部にヘラ描き沈線文あり。1/4 の残存。	①ヨコナデ ②ヘラミガキ	①ヘラミガキ ②ハクリ	灰白色 灰白色	石・長 (1~3) ○		6
37	甕	口径 (13.8) 残高 5.0	外反口縁。頸部に髹描き沈線紋 4 条あり。1/5 の残存。	①ヨコナデ ②ヘラミガキ	①ヨコナデ ②ヘラミガキ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~4) ○		6
38	甕	口径 (14.9) 残高 8.7	外反口縁。口縁端部は丸く仕上げ。1/4 の残存。	①ヨコナデ ②ハケ (7本/cm) →ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰褐色 黒褐色	石・長 (1~3) ○	黒斑	
39	甕	口径 11.6 残高 16.0	外反口縁。口縁端部に斜格子目文あり。1/2 の残存。	①ヨコナデ ②ハケ (6~7本/cm) ③ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰黄色 灰褐色	石・長 (1~2) ○	黒斑	6
40	甕	口径 12.6 残高 13.5	口縁部は内湾し。頸部にヘラ描き沈線文 5 条あり。2/3 の残存。	①ヨコナデ ②ハケ (7本/cm) →ヘラミガキ	ヘラミガキ ナデ	黄褐色 褐色	石・長 (1~3) 金	黒斑	
41	甕	口径 (19.2) 残高 4.7	外反口縁。口縁端部に斜格子目文あり。1/2 の残存。	①ナデ ②ハケ (5~6本/cm) →ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~2) ○		6
42	甕	口径 (14.6) 残高 8.4	長い頸部に短く外反する口縁部。口縁端部は「コ」字状。1/4 の残存。	①ヨコナデ ②ハケ (10本/cm) ③ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1) ○		6
43	甕	口径 (17.9) 残高 4.7	大きく外反する口縁部。口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。小片。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~5) 金		
44	甕	口径 (14.3) 残高 9.7	長い頸部に大きく外反する口縁部。口縁端部は丸い。1/4 の残存。	①ヨコナデ ②ハケ →ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~9) ○	黒斑	
45	甕	口径 (19.0) 残高 11.4	長い頸部に大きく外反する口縁部。頸部に髹描き沈線文 8 条あり。1/4 の残存。	①マメツ ②ヘラミガキ ③ヘラミガキ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) ○		7
46	甕	口径 (13.5) 残高 5.1	大きく外反する口縁部。口縁部内面に断面三角形の貼付凸帯あり。1/4 の残存。	①ヨコナデ ②ヘラミガキ	ヘラミガキ ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~4) ○		7
47	甕	口径 (15.3) 残高 3.7	大きく外反する口縁部。口縁部内面に断面三角形の貼付凸帯あり。口縁端部に沈線文 1 条あり。小片。	①ヨコナデ ②ハケ (4本/cm) →ヘラミガキ	①ヘラミガキ ②ハケ (7本/cm) →ヘラミガキ	灰白色 灰白色	石・長 (1~4) ○	黒斑	7
48	甕	口径 (19.9) 残高 5.2	無蓋甕。口縁部に径 0.4cm 大の円孔。頸部に髹描き沈線文 6 条と刺突文あり。小片。	①ヨコナデ ②マメツ	マメツ (指頭痕)	灰黄色 灰黄色	石・長 (1) ○		7
49	甕	口径 (30.2) 残高 4.4	外反口縁。口縁端部に沈線文 1 条と斜格子目文あり。口縁部内面に断面三角形の貼付凸帯あり。口縁部に沈線文 3 条あり。小片。	①マメツ ②ヘラミガキ	ヘラミガキ ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~4) ○		7

SD1 下層出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量 (cm)	形態・論文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
50	壺	残高 9.4	ヘラ抜き沈線文7条と刺突文あり。1/3の残存。	ハケ →ヘラミガキ	ハケ →ヘラミガキ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~4) 金 ○		
51	壺	残高 4.3	ヘラ抜き沈線文2条と沈線文間に刺突文あり。1/4の残存。	ヘラミガキ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ○		
52	壺	残高 3.0	胎付凸帯2条と凸帯上に刻目あり。赤色塗彩。小片。	ヘラミガキ	ヘラミガキ ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長 (1~2) ○		
53	壺	残高 3.5	ヘラ抜き沈線文2条あり。赤色塗彩。小片。	板ナデ	板ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長 (1~2) ○		
54	壺	残高 5.7	貝殻施文土器。貝殻腹線による斜格子目文と柳抜き沈線文4条あり。小片。	ナデ	ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長 (1~2) ○		7
55	壺	残高 2.2	貝殻施文土器。貝殻腹線による斜格子目文あり。	ヘラミガキ	ナデ	黒色 黄灰色	石・長 (1) ○	黒斑	
56	壺	残高 2.4	柳抜き沈線文と斜格子目文あり。小片。	ヘラミガキ	マメツ	茶褐色 灰褐色	石・長 (1~3) ○		
57	壺	残高 12.2	刷製部片。無文。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	赤褐色 赤褐色	石・長 (1~2) ○		
58	壺	残高 11.2	柳抜き沈線文17条と3条以上あり。小片。	ヘラミガキ →ナデ	ヘラミガキ ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1) ○	黒斑	
59	壺	残高 6.9	ヘラ抜き沈線文4条あり。1/5の残存。	マメツ (ヘラミガキ)	ヘラミガキ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~4) ○	黒斑	
60	壺	残高 2.6	断面三角形の胎付凸帯2条、凸帯上に押圧を施す。小片。	マメツ	ナデ	黒色 灰黄色	石・長 (1~3) ○		7
61	壺	残高 22.9	肩部にヘラ抜き沈線文6条、胴部に胎付け凸帯1条(凸帯上に刻目)、ヘラ抜き沈線文5条、3条、6条あり。1/5の残存。	ハケ →ヘラミガキ	マメツ・ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~6) ○	黒斑	7
62	壺	口径 (54.0) 残高 9.4	大型品。口縁部にヘラ抜き沈線文1条と刻目、胴部にヘラ抜き沈線文3条、口縁部内面に胎付凸帯あり。1/5の残存。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長 (1~6) ○	黒斑	7
63	壺	残高 28.8	断面方形の胎付凸帯。凸帯上にヘラ抜き沈線文4条とタテ方向の沈線文32条と16条あり。小片。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰白色 灰白色	石・長 (1~5) ○	黒斑	7
64	壺	底径 (8.4) 残高 8.6	僅かに上げ底。1/2の残存。	ヘラミガキ ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) ○		7
65	壺	底径 (7.8) 残高 6.4	僅かに上げ底。底部完形品。	ハケ (6~7本/cm)	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~5) ○	黒斑	7
66	壺	底径 (8.4) 残高 1.5	僅かに上げ底。1/2の残存。	ヘラミガキ	ハケ →ヘラミガキ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) ○	黒斑	
67	壺	底径 (11.6) 残高 3.7	僅かに上げ底。小片。	ハケ	ヨコナデ	赤褐色 橙色	石・長 (1~5) ○	黒斑	
68	壺	底径 12.3 残高 5.7	僅かに上げ底。底部完形品。	ヘラミガキ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~5) 赤色酸化土粒 ○	黒斑	8
69	壺	底径 (8.7) 残高 2.7	平底。2/3の残存。	ハケ →ヘラミガキ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~4) ○		
70	壺	底径 (9.4) 残高 5.4	突出する底部。底部完形品。	ヘラミガキ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~4) ○	黒斑	
71	壺	底径 (6.2) 残高 2.0	突出する僅かに上げ底。1/3の残存。	ヘラミガキ →ナデ	ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~6) ○	黒斑	

遺物観察表

SD1 下層出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
72	甕	底径 残高 6.0 5.0	突出する上げ底。底部完形品。	ヘラミガキ (指頭痕)	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1~3) ○		8
73	甕	底径 残高 (5.9) 7.3	突出する上げ底。1/2の残存。	ハケ →ヘラミガキ	ハケ →ヘラミガキ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~2) ○		8
74	甕	底径 残高 (22.0) 7.2	大型品。覆かき上げ底。1/2の残存。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~3) ○	黒斑	
75	甕	底径 残高 10.4 14.5	大型品。上げ底。	ハケ (8本/cm) →ヘラミガキ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~4) 金 ○	黒斑	8
76	蓋	つば径 残高 6.7 6.5	葉の蓋。つまみ上縁部は平出。完形品。	ハケ(4~5本/cm) →ナデ	ハケ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~5) ○	黒斑	8
77	にこぼり	底径 残高 1.4 3.0	手づくね土器。内外面には指頭痕が顕著に残る。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ○		
78	紡錘車	直径 厚さ 4.3 1.0	製部品の転用品。径0.3cm大の孔を両面から穿つ。	ヘラミガキ	マメツ	黄褐色	石・長 (1~6) ○		8
79	紡錘車	直径 厚さ 3.9 0.8	製部品の転用品。径0.3cm大の未貫通の孔あり。	ヘラミガキ	ナデ	黄褐色	石・長 (1~4) ○		8
80	紡錘車	直径 厚さ 3.9 0.7	製部品の転用品。径0.5cm大の未貫通の孔あり。	マメツ	マメツ	灰黄色	石・長 (1~6) ○		
81	深鉢	残高 4.7	口唇部に刻目。口縁下に削目凸帯。凸帯下にヘラ描き斜線文あり。小片。	染痕	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~2) 金 ○		8
82	深鉢	残高 2.5	口唇部に削目あり。小片。	ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) 金 ○	黒斑	8
83	浅鉢	口径 残高 (36.0) 2.3	口縁縁部は内方に肥厚する。小片。	ミガキ	ミガキ	黒色 黒色	石・長 (1) 金 ○		8

表6 SD1 下層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
84	伐採斧	1/4	結晶片岩	(14.0)	(4.0)	(1.9)	115.07		8
85	台石	3/4	砂岩	10.7	(7.5)	3.9	454.12		8
86	石楯	ほぼ完形	サヌカイト	2.7	2.1	0.3	2.03	凹基無蓋式	8

表7 SD1 中層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
87	甕	口径 残高 (21.0) 9.6	折曲口縁。無文。1/2の残存。	白ヨコナデ 刷ナデ	白ヨコナデ 刷ヘラミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~3) ○	黒斑	9
88	甕	口径 残高 (18.7) 3.7	折曲口縁。口縁端部に刻目。胴部外面に磨描き沈線文8条あり。小片。	白ヨコナデ 刷ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~2) 赤色酸化土粒 ○		
89	甕	口径 残高 (22.0) 6.5	貼付口縁。口縁端部に刻目。胴部外面に磨描き沈線文11条と刺突文あり。小片。	白ヨコナデ 刷ハケ →ヘラミガキ	ヘラミガキ →ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) ○	黒斑	9
90	甕	口径 残高 (26.8) 5.6	貼付口縁。口縁端部に刻目。胴部外面に磨描き沈線文10条と刺突文あり。小片。	白ヨコナデ 刷ハケ	ヘラミガキ ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~2) 金 ○		
91	甕	残高 7.2	胴部外面に磨描き沈線文7条と5条。沈線文間に山形文。沈線文下に刺突文あり。小片。	ヘラミガキ	ナデ (ハクリ)	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~3) 赤色酸化土粒 ○		9

SD1 中層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・論文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
92	甕	口径 (32.6) 残高 6.6	断面三角形の貼付凸帯、凸帯上に 刻目あり。小片。	白マメツ 跡ハケ(10本/cm) →ナデ	白マメツ 跡ヘラミガキ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) 角閃石 ○	黒斑	9
93	甕	口径 (44.6) 残高 8.8	大型品。折曲口縁。無文。小片。	白ヘラミガキ 跡ハケ →ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ○		
94	甕	底径 5.6 残高 2.7	上げ底。底部完形品。	ナデ	ヘラミガキ ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~3) ○	黒斑	
95	甕	底径 5.0 残高 2.6	僅かに上げ底。底部完形品。	マメツ (指頭痕)	ナデ	赤橙色 赤橙色	石・長 (1~5) ○	黒斑	
96	甕	底径 (7.4) 残高 8.2	僅かに上げ底。1/2の残存。	ハケ →ヘラミガキ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長 (1~3) 金 ○		
97	甕	底径 7.8 残高 4.3	くびれをもつ上げ底。底部完形品。	ヘラミガキ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) 赤色酸化土粒 ○		
98	甕	底径 (7.7) 残高 4.7	くびれをもつ上げ底。1/3の残存。	ヘラミガキ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~5) ○		
99	壺	口径 (24.8) 残高 3.5	外反口縁。口縁端部に刻目あり。小 片。	ハケ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1~6) ○		
100	壺	口径 (10.8) 残高 4.4	外反口縁。口縁端部に刻目あり。小 片。	ハケ →ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) ○	黒斑	
101	壺	残高 2.7	把手部。径 0.3cm 大の孔 2ヶあり。	ナデ	ナデ	黒色	石・長 (1~2) ○		9
102	壺	残高 4.4	頸部にヘラ掻き沈線文 4 条あり。小 片。	ハケ (5 本/cm) →ナデ	ヘラミガキ ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~2) ○		
103	壺	残高 2.9	断面三角形の貼付凸帯、凸帯上に 連続状刻目文あり。ヘラ掻き沈線文 3 条あり。小片。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~2) ○		
104	鉢	口径 (21.9) 残高 10.3	内湾口縁。口縁端部は上方に肥厚し、 口縁端部はナデ凹む。1/4の残存。	白ヨコナデ 跡ヘラミガキ	白ヨコナデ 跡ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) 赤色酸化土粒 ○	黒斑	9
105	高坏	残高 5.0	坏部下位に様をもち、口縁部は大き く外反する。小片。	ハケ (8~9 本/cm) →ナデ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~2) ○		
106	ミナコフ	底径 3.2 残高 2.2	手づくね土器。上げ底。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ○		9
107	ミナコフ	残高 1.7	手づくね土器。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ○		9
108	浅鉢	残高 2.5	口縁部は内方に肥厚。小片。	ナデ	ナデ	灰黄色 黒色	石・長 (1) ○		

表 8 SD1 中層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
109	石瓶丁	ほぼ完形	緑色片岩	4.50	11.20	0.65	66.59		10
110	石鎌	ほぼ完形	緑色片岩	16.50	4.80	1.40	152.33	石斧の再加工品	10
111	伐採斧	ほぼ完形	砂岩	16.50	5.90	3.50	551.94		10
112	鉾石	1/2	砂岩	(9.80)	8.80	7.40	810.29		10
113	スクレイパー	ほぼ完形	チャート	3.80	1.50	0.40	3.19		

遺物観察表

表9 SD1 ベルト・トレンチ出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
114	甕	口径 (24.6) 残高 7.5	折曲口縁。胴部外面に横書き沈線文11条と竹管文あり。小片。	☐ヘラミガキ 刷ハケ →ヘラミガキ	ハケ →ヘラミガキ	赤褐色 灰黄色	石・長 (1~3) 金 ○		
115	甕	口径 (26.0) 残高 3.1	貼付口縁。口縁端部に刻目。胴部外面に横書き沈線文3条あり。小片。	☐ヨコナデ 刷ハケ	ヘラミガキ	赤褐色 赤褐色	石・長 (1~3) ○		
116	甕	底径 (6.3) 残高 12.3	僅かに上げ底。1/3の残存。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~7) 金 ○	保存者	
117	甕	口径 (55.8) 残高 4.8	大型品。口縁端部にヘラ書き沈線文3条とタテ沈線文15条、頸部にヘラ書き沈線文2条あり。小片。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰白色 灰白色	石・長 (1~3) ○	黒斑	
118	甕	残高 7.7	胴部にヘラ書き沈線文1条と沈線文の上下に刺突文あり。1/4の残存。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~4) ○	黒斑	10
119	紡錘車	直径 4.2 厚さ 0.7	胴部片の転用品。1/2の残存。	ヘラミガキ	ナデ	橙色	石・長 (1) ○		10
120	浅鉢	残高 3.6	口縁部内面に沈線1条が巡る。小片。	ミガキ	ミガキ	灰黄色 黒色	石 (1) ○		10

表10 SD1 ベルト・トレンチ出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
121	伐採斧	ほぼ完形	玄武岩	11.00	5.90	3.70	453.68		10
122	スクレイパー	ほぼ完形	黒曜石	3.20	2.80	1.00	6.65		

表11 SD1 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
123	浅鉢	口径 36.9 残高 2.6	蹄状の口縁部。小片。	マメツ	マメツ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~2) ○		10

表12 SD1 地点不明出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
124	割片	ほぼ完形	安山岩	9.6	8.0	1.5	113.02		10

表13 溝出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
125	甕	残高 4.5	折曲口縁。断面三角形の凸帯を貼付け、凸帯上に刻目あり。小片。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~2) ○	SD2	
126	甕	残高 2.4	折曲口縁。胴部に横書き沈線文5条あり。小片。	ハケ	ヘラミガキ ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~5) ○	SD2	
127	甕	残高 3.1	貼付凸帯上に沈線文1条あり。小片。	ヘラミガキ	ナデ	黒色 灰褐色	石・長 (1~2) ○	SD2	
128	甕	底径 (5.2) 残高 4.4	中央部が凹む上げ底。底部外面に板状圧痕あり。1/4の残存。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ○	SD2	
129	甕	底径 (9.3) 残高 5.6	厚みのある平底。1/4の残存。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~3) ○	SD2	
130	甕	口径 (27.7) 残高 11.4	折曲口縁。口縁上部に刻目。胴部にヘラ書き沈線文8条と刺突文あり。1/5の残存。	☐ヨコナデ 刷ハケ (6本/cm) →ヘラミガキ	☐ヨコナデ 刷マメツ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~3) ○	SD5	11

溝出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
131	甕	底径 (5.5) 残高 3.7	平底。1/5 の残存。	ハケ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1-3) ○	SD11	
132	壺	残高 4.1	肩部片。	平行叩き →回転カキメ	円弧叩き	灰色 灰色	密 ○	SD11	11
133	甕	底径 (4.7) 残高 2.9	突出部をもつ上げ底。1/2 の残存。	ナデ (指頭痕)	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1-4) ○	SD16 黒斑	

表 14 SK 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
134	甕	残高 3.4	柳掻き沈線文 4 条と、刺突文あり。 小片。	ハケ →ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1-3) ○	SK1	11
135	甕	底径 (5.5) 残高 5.0	僅かに上げ底。1/4 の残存。	ヘラミガキ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1-3) 金 ○	SK2	
136	甕	底径 (7.9) 残高 3.3	くびれをもつ上げ底。1/5 の残存。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1-3) ○	SK3	

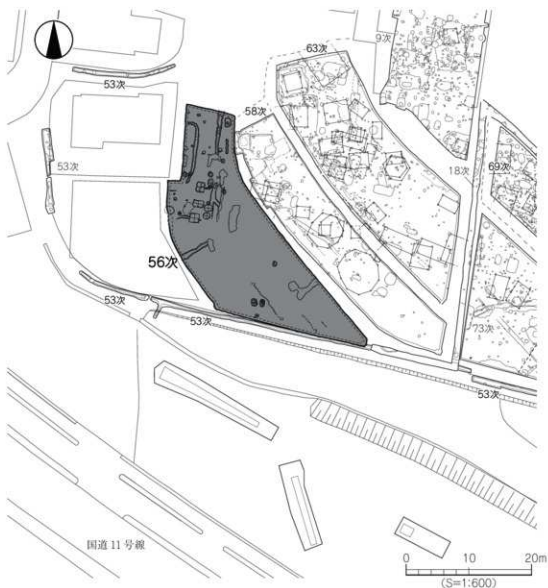
表 15 第三層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
137	壺	口径 (18.6) 残高 2.7	広口壺。外反口縁で、口縁端部は上下に肥厚。小片。	①ヨコナデ ②ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1-2) ○		
138	壺	残高 3.9	胴部片。柳掻きの弧文あり。	ヘラミガキ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1-2) ○	黒斑	
139	鉢	残高 3.5	口縁部外面に沈線文 3 条と貝殻腹縁による同点文あり。小片。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1-2) ○	黒斑	
140	紡錘車	直径 5.4 厚さ 0.9	転用品。両面穿孔。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙色 橙色	石・長 (1) 赤色酸化土粒 ○		11
141	甕	口径 (18.0) 残高 4.8	外反口縁。1/5 の残存。	ヨコナデ	ハケ (8 本/cm)	橙色 橙色	石・長 (1) ○		
142	甕	口径 (15.8) 残高 7.3	内湾口縁。口縁端部は内傾。1/4 の残存。	①マメツ ②ハケ (7-8 本/cm)	①ヨコナデ、ハケ ②板ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1) 金 ○		
143	高坏	口径 (16.0) 底径 (13.0) 器高 12.3	輪型の坏部。脚柱部に面取り痕あり。坏部 1/2 を欠損。赤色塗彩土器。	①マメツ ②ナデ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1) 赤色酸化土粒 ○		11
144	高坏	底径 (11.7) 残高 11.3	柱実の柱部。柱部に面取り痕あり。赤色塗彩土器。	①ヘラケズリ ②ヨコナデ	ヘラケズリ	灰黄色 灰黄色	密 ○		11
145	壺	残高 18.4	頸～胴部片。1/5 の残存。	平行叩き →ハケメ	円弧叩き	灰褐色 茶褐色	密 ○		11
146	深鉢	残高 1.9	口唇部に割目あり。小片。	ナデ	ナデ	黒褐色 黒褐色	石 (1) ○		11

第4章 久米高畑遺跡 56次調査

第1節 調査の経緯

2002(平成14)年11月18日より、屋外調査を開始した。重機により表土を掘削後、作業員による手作業にて包含層の掘り下げや遺構検出作業を行った。検出した遺構は溝や土坑、柱穴である。最初に時期の新しい溝の掘り下げに取り掛かった。調査区北半部には数条の溝があり、それらの掘削と測量を行った。その後、柱穴や土坑の半載・掘削・測量等を行った。なお、遺構保護のため一部の遺構は完掘していない。2003(平成15)年1月13日にて、屋外作業を終了した。



第30図 調査地位置図

第2節 層位 (第31・32図、図版13)

調査地は、調査以前は水田であった。現況の標高は、35.7～36.2mである。調査で確認した土層は、以下の3種類である。

第Ⅰ層：近現代の水田耕作に伴う耕作土〔灰黄褐色粘質土 (10YR 4/2)〕で、地表下6～45cmまで開発が行われている。

第Ⅱ層：灰褐色粘質土 (5YR 4/2) で調査区はほぼ全域にみられ、層厚3～35cmである。

第Ⅲ層：明黄褐色粘質土 (10YR 6/8) で、本層上面が調査における最終遺構検出面である。調査では溝や土坑、柱穴を検出した。本層中には、径3～10cm大の砂岩礫が比較的含まれている。

なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へA・B・C……I、西から東へ1・2・3……8とし、A1・A2……I8といったグリッド名を付した。グリッドは遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。

第3節 遺構と遺物

調査では、弥生時代から近現代までの遺構・遺物を検出した。検出した遺構は溝6条、土坑9基、柱穴29基である。遺物は弥生土器（前期）、土師器（古墳時代～中世）、須恵器（古墳時代）、陶磁器（近世～近代）、石器が出土した。なお、遺物の出土量は遺物収納箱（44×60×14cm）4箱分である。ここでは、遺構別に説明する。

1. 溝

調査では、6条の溝（SD1～6）を検出した。検出状況から、全ての溝は水田耕作に伴う跡址と考えられる。

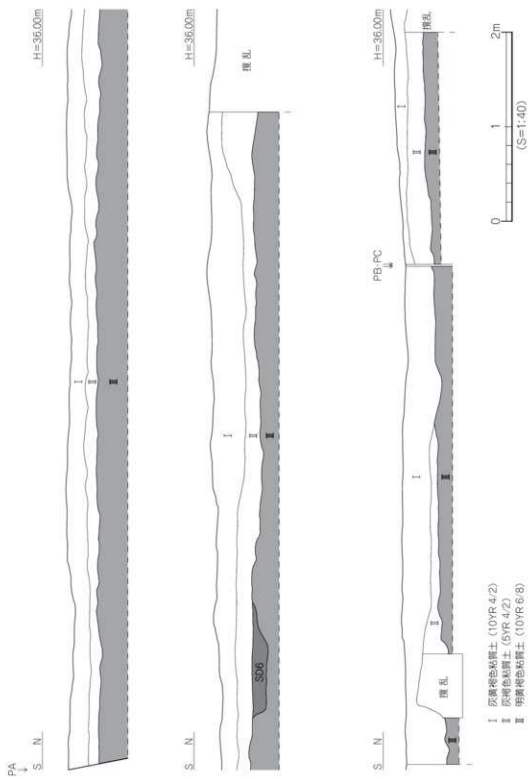
SD1（第34図、図版13）

調査区北西部 B2～D2 区で検出した南北の溝で、溝北側は西に向かって屈曲し、溝南端は消滅している。溝の規模は検出長 9.70m、幅 40～68cm、深さは 10cm である。断面形態は皿状をなし、埋土は第Ⅱ層と同様の灰褐色粘質土 (5YR 4/2) 単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

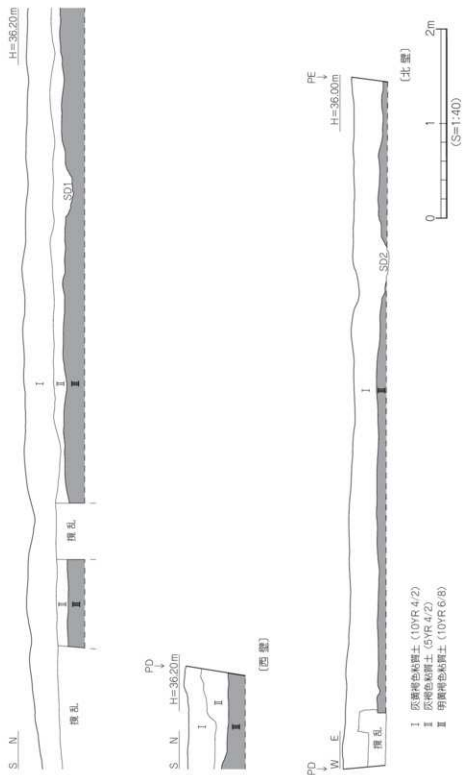
時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土より SD1 は近現代の溝と考えられる。

SD2（第34図）

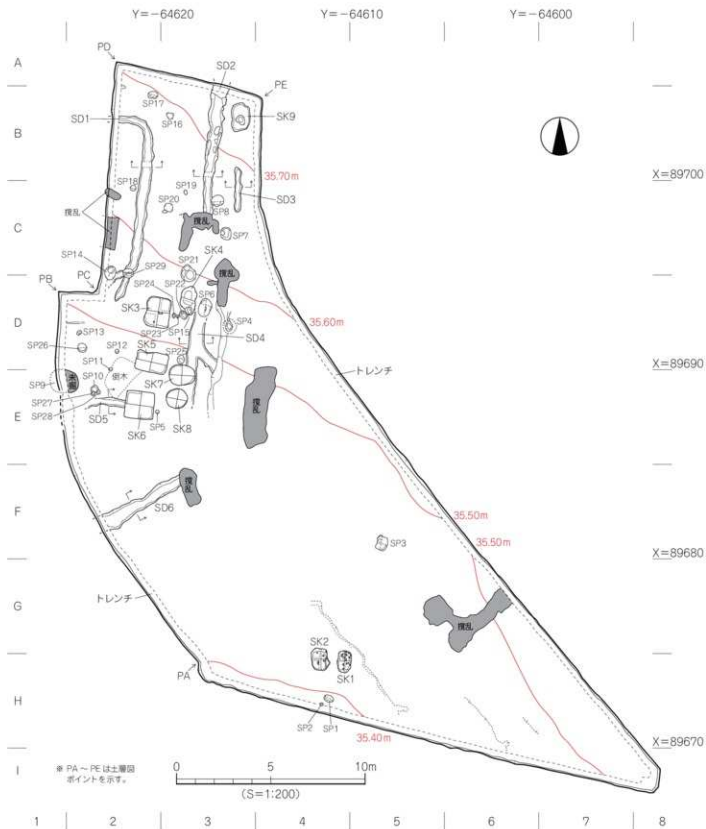
調査区北部 B3～C3 区で検出した南北方向の溝で、溝南側は消滅し、北側は調査区外に続く。溝の規模は検出長 6.68m、幅 50～88cm、深さは 9cm である。断面形態は皿状をなし、埋土は第Ⅰ層と同様の灰黄褐色粘質土 (10YR 4/2) 単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは、遺物の出土はない。



第31图 西壁土层图(1)



第 32 図 西壁 (2)・北壁土層図



第 33 図 遺構配置図

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位より SD2 は近現代の溝とする。

SD3 (第 34 図)

調査区北部 B・C3 区で検出した南北方向の溝で、溝両端は消滅している。溝の規模は検出長 2.38m、幅 30～38cm、深さは 8cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は第 I 層と同様の灰黄褐色粘質土 (10YR 4/2) 単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位より SD3 は近現代の溝とする。

SD4 (第 34 図)

調査区中央部北西寄り D・E3 区で検出した南北方向の溝で、溝中央部付近で分岐しており、溝両端は消滅している。溝の規模は検出長 4.72m、幅 51～76cm、深さは 6cm である。断面形態は皿状をなし、埋土は第 II 層と同様の灰褐色粘質土 (5YR 4/2) 単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土より SD4 は近現代の溝とする。

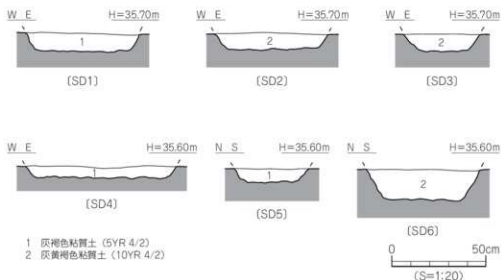
SD5 (第 34 図)

調査区中央部西寄り E2 区で検出した東西方向の溝で、溝両端は消滅している。溝の規模は検出長 2.00m、幅 30～40cm、深さは 8cm である。断面形態は皿状をなし、埋土は第 II 層と同様の灰褐色粘質土 (5YR 4/2) 単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土より SD5 は近現代の溝とする。

SD6 (第 34 図)

調査区中央部南西寄り F2・3 区で検出した北東-南西方向の溝で、溝東側は攪乱に削平され、西



第 34 図 SD1～6 断面図

側は調査区外に続く。溝の規模は検出長 488m、幅 50～92cm、深さは 16cm である。断面形態は深さのある皿状をなし、埋土は第Ⅰ層と同様の灰黄褐色粘質土 (10YR 4/2) 単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位より SD6 は近現代の溝とする。

2. 土 坑

調査では、9 基の土坑を検出した。このうち、SK1・2 は弥生時代、その他は SK4・7・9 (時期不明) を除き、全て近代の土坑である。

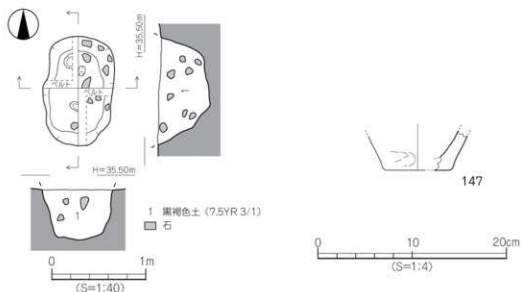
SK1 (第 35 図、図版 14)

調査区南側 G4～H5 区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径 1.15m、短径 0.73m、深さは 53cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土 (7.5YR 3/1) 単層である。土坑基底面には凹凸がみられ、北側から南側へ向けて緩やかな傾斜をなす。遺物は埋土中より弥生土器小片が数点出土したほか、第Ⅲ層中に含まれる砂岩礫 (径 3～10cm) が比較的多量に出土した。

出土遺物 (図版 16)

147 は甕形土器の底部。推定底径は 6.8cm で、平底をなす。色調は橙色で、底部外面には指頭痕が残る。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、概ね弥生時代前期末の土坑と考えられる。



第 35 図 SK1 測量図・出土遺物実測図

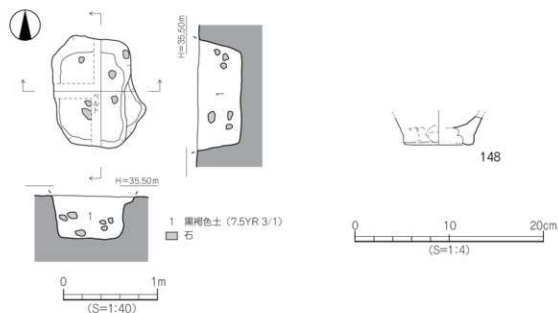
SK2 (第 36 図、図版 14)

調査区南側 G・H4 区で検出した土坑で、平面形態は不整の楕円形をなし、規模は長径 1.14m、短径 0.93m、深さは 45cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土 (7.5YR 3/1) 単層である。土坑基底面には凹凸はなく、平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器小片が数点出土したほか、第Ⅲ層中に含まれる砂岩礫 (径 3～8cm) が少量出土した。

出土遺物 (図版 16)

148 は甕形土器。推定底径 6.4cm で、厚みのある平底をなす。色調は橙色で、底部外面には指頭痕が残る。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、概ね弥生時代前期末の土坑と考えられる。



第 36 図 SK2 測量図・出土遺物実測図

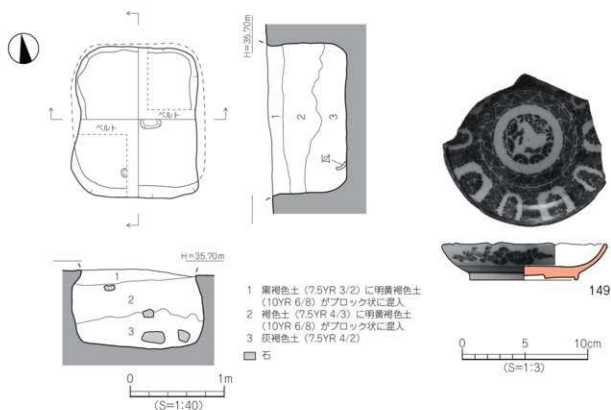
SK3 (第 37 図、図版 15)

調査区中央部北西寄り D2・3 区で検出した土坑で、平面形態は隅丸長方形をなし、規模は長さ 1.58m、幅 1.33m、深さは 83cm である。断面形態は南壁が逆台形状をなすが、その他の壁体は袋状となる。埋土は 3 層に分層され、1 層：黒褐色土 (7.5YR 3/2) に明黄褐色土 (10YR 6/8) がブロック状に混入、2 層：褐色土 (7.5YR 4/3) に明黄褐色土 (10YR 6/8) がブロック状に混入、3 層：灰褐色土 (7.5YR 4/2) である。土坑基底面には凹凸は見られず、ほぼ平坦である。遺物は埋土中より、陶磁器や瓦のほか径 5 ~ 20cm 大の河原石が出土した。

出土遺物 (図版 16)

149 は肥前系の染付皿。推定口径 12.8cm で、口縁部は波状をなす。底部外面中央部は凹み、高台畳付けと底部外面は無軸となる。胎土は灰白色をなし、透明釉が掛けられている。内面には印判による菊葉文が描かれている。

時期：出土遺物の特徴より明治時代、18 世紀後半から 19 世紀前半と考えられる。

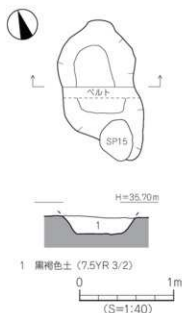


第 37 図 SK3 測量図・出土遺物実測図

SK4 (第 38 図)

調査区中央部北西寄り D3 区で検出した土坑で、土坑南側は柱穴 SP15 に削平されている。平面形態は不整の楕円形をなし、規模は長径 1.56m、短径 0.83m、深さは 20cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は黒褐色土 (7.5YR 3/2) 単層である。土坑基底面には凹凸は見られず、ほぼ平坦である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であり、時期は不明である。

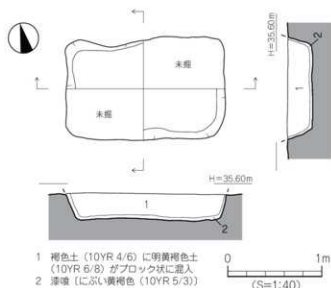


第 38 図 SK4 測量図

SK5 (第 39 図、図版 15)

調査区中央部北西寄り D2～E3 区で検出した土坑で、平面形態は隅丸長方形をなし、規模は長さ 1.67m、幅 1.08m、深さは 29cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は褐色土 (10YR 4/6) に明黄褐色土 (10YR 6/8) がブロック状に混入するものである。土坑基底面には凹凸は見られず、ほぼ平坦である。土坑壁体及び基底面には、厚さ約 2cm の漆喰 [にぶい黄褐色 (10YR 5/3)] が全面に貼り付けられていた。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、土坑内に漆喰が施されていることから、概ね近代以降と考えられる。



第 39 図 SK5 測量図

SK6 (第 40 図)

調査区中央部西寄り E2 区で検出した土坑で、平面形態は隅丸方形をなし、規模は長さ 1.53m、幅 1.52m、深さは 52cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は 3 層に分層でき、1 層：褐色土 (10YR



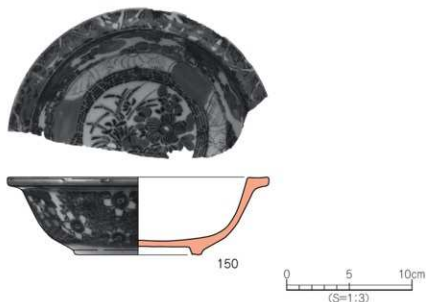
第 40 図 SK6 測量図

4/6) に明黄褐色土 (10YR 6/8) がブロック状に混入、2層：褐灰色土 (10YR 4/1)、3層：褐灰色粘質土 (10YR 4/1) である。土坑南東部の基底面にはテラス状の高床部が認められる。なお、基底面には凹凸は見られず、ほぼ平坦である。土坑壁体及び基底部には、厚さ約 2cm の漆喰 [にぶい黄褐色 (10YR 5/3)] が全面に貼り付けられていた。遺物は埋土中より、磁器の鉢が出土した。

出土遺物 (第 41 図、図版 16)

150 は砥部焼の鉢。口縁部は水平にのび、断面台形状の高台をもつ。内外面には印判が施され、その上からは赤褐色の文様が描かれている。全面施釉で、胎土は灰白色である。

時期：出土遺物の特徴より幕末から明治時代、18 世紀後半から 19 世紀前半と考えられる。

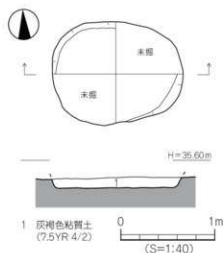


第 41 図 SK6 出土遺物実測図

SK7 (第 42 図、図版 15)

調査区中央部西寄り D・E3 区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径 1.37m、短径 1.10 m、深さは 11cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は灰褐色粘質土 (7.5YR 4/2) 単層である。土坑基底面には凹凸は見られず、ほぼ平坦である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、時期は不明である。



第 42 図 SK7 測量図

SK8 (第 43 図、図版 15)

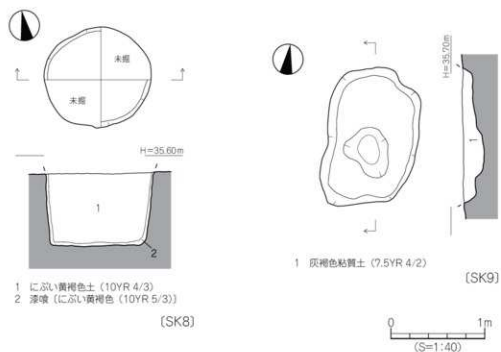
調査区中央部西寄り E3 区で検出した土坑で、平面形態は円形をなし、規模は直径 1.06 ~ 1.10m、深さは 77cm である。断面形態は筒状をなし、埋土はにぶい黄褐色土 (10YR 4/3) 単層である。土坑基底面には凹凸は見られず、ほぼ平坦である。土坑壁体及び基底面には、厚さ約 2cm の漆喰 [にぶい黄褐色 (10YR 5/3)] が全面に貼り付けられていた。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、漆喰が施されていることから概ね近代以降と考えられる。

SK9 (第 43 図)

調査区北部 B3 区で検出した土坑で、平面形態は不整楕円形をなし、規模は長径 1.56m、短径 0.96 m、深さは 23cm である。断面形態は進台形状をなし、埋土は灰褐色粘質土 (7.5YR 4/2) 単層である。土坑基底面には凹凸は見られず、平坦である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、時期は不明である。



第 43 図 SK8・9 測量図

3. 柱 穴

調査では、柱穴 29 基を検出した。柱穴掘り方埋土で分類すると、以下の 5 種類 (埋土①~⑤) に分けられる。

埋土①：黒褐色粘質土 (10YR 2/2)

埋土②：黒褐色粘質土 (10YR 2/2) に明黄褐色粘質土 (10YR 6/8) がブロック状に混入

埋土③：暗褐色粘質土（7.5YR 3/4）

埋土④：褐色粘質土（7.5YR 4/3）

埋土⑤：灰黄褐色粘質土（10YR 4/2）

各埋土の柱穴は埋土①：8基（SP1・4・5・11・12・17・18・26）、埋土②：3基（SP6・13・14）、埋土③：3基（SP3・16・19）、埋土④：1基（SP10）、埋土⑤：14基（SP2・7・9・15・20～25・27～29）となる。各柱穴の詳細は、一覧表に記す（表18）。

4. 地点不明出土遺物

本調査では、重機による表土掘削時及び遺構検出時に遺物が出土した。ただし、出土層位や地点が不明であり、ここでは地点不明遺物として掲載する。

出土遺物（第44・45図、図版16）

151～153は須恵器。151は広口壺の口縁部片、152は短頸壺である。152の肩部には沈線2条と沈線間に刺突列点文を施す。153は大型の甕で、外面に平行叩き、内面には同心円叩き・円弧叩きがみられる。古墳時代後期。154は備前焼の播鉢。口縁部は下方に拡張し、凹線2条を施す。体部内面には11条1組の条線がみられる。室町時代。155は瓦質の焙烙。推定口径は33.8cmで、口縁端部は内方に肥厚し、径0.6cm大の孔を穿つ。156は土師器土釜の脚部片。断面形態は円形をなし、直径は約2cmである。鎌倉時代。157は土師器の高坏。低脚で、器壁は厚い。外面には、僅かに面取りの痕跡を残す。7世紀。158は瓦質の蓋。推定口径11.0cmで、天井部には径1.6cm大の孔を穿つ。色調は灰色をなし、天井部内面には粘土紐巻き上げ痕が残る。江戸～明治時代。159・161は磁器の碗。159は器形に重みがあり、161は体部外面と底部に染付を施す。160・162は陶器の碗。160は体部外面に染付（赤）がみられる。163は磁器小碗。体部外面には染付（赤）がみられ、口縁部内面には圈線が巡る。164は磁器角坏で、型押成形である。幕末～明治時代。165は砥部焼の皿。内外面には印判による染付を施す。明治時代。

第4節 小 結

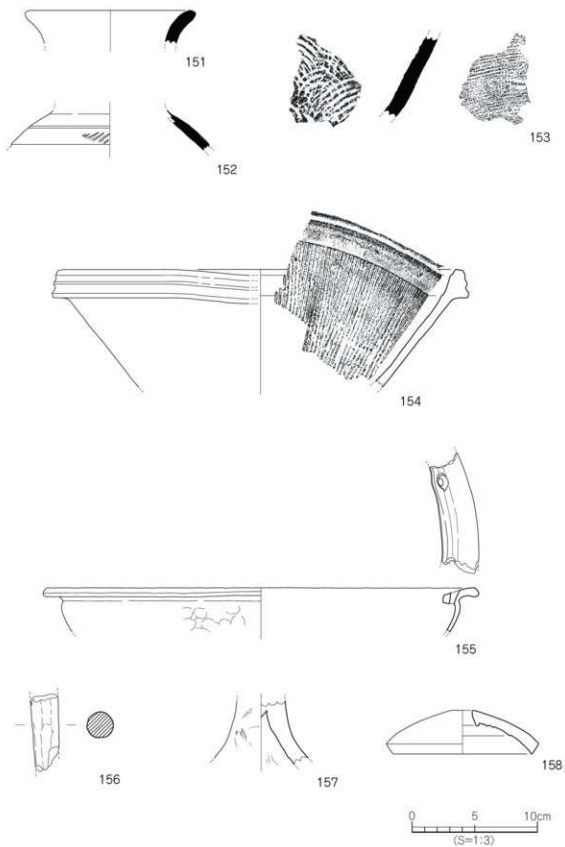
調査では、弥生時代から近現代の遺構・遺物を確認した。ここでは、時代別に概要を説明する。

1. 弥生時代

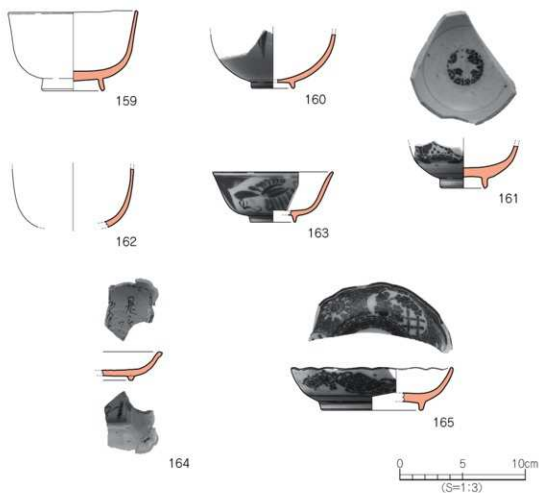
弥生時代の遺構は、土坑2基を検出した。SK1・2は長径1.15m前後の楕円形土坑で、土坑内からは弥生時代前期末に時期比定される土器片が出土した。調査地の所在する来住台地上では該期の土坑が多数検出されており、本調査地や近隣地域が前期集落の範囲であったことが伺われる。

2. 古墳時代～中世

古墳時代から中世の遺構は未検出であるが、遺構検出時や表土掘削時に該期の遺物が出土した。古墳時代は6世紀代、古代は7世紀代に時期比定される須恵器や土師器が出土し、中世では鎌倉時代の土釜片や室町時代の備前焼などが出土している。



第 44 図 地点不明出土遺物実測図 (1)



第 45 図 地点不明出土遺物実測図 (2)

3. 近世～近現代

近世から近代にかけては、2基の土坑を検出した。SK3・6は隅丸長方形をなす土坑で、土坑内からは幕末から明治初頭、18世紀後半から19世紀前半に時期比定される陶磁器片が出土した。出土状況から、これらの遺物は投棄されたものと推測される。なお、SK6の土坑壁体内全面には厚さ2cm程度の漆喰が貼られている。近現代では、水田耕作に伴う鋤溝6条を検出した。鋤溝は真北方向に平行または直交して掘削されており、規模は検出幅30～92cm、深さは検出面下6～16cmである。これらの鋤址は2種類の埋土で埋没しており、検出層位や埋土から少なくとも2面以上の水田面が存在していたものと推測される。

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

地区欄 グリッド名を記載。

規模欄 () は現存値を示す。

埋土欄 複数の土層がある場合は、以下のように記載している。

例) 「褐色土 他」

出土遺物欄 遺物名称を略記した。

例) 弥→弥生土器、陶→陶磁器、石→石製品

(2) 遺物観察表

法量欄 (): 復元推定値

胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~2) → 「1~2mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略記について

◎→良好

表 16 溝一覧

溝 (S D)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	E2~D2	南北	皿状	(9.70) × 0.40 ~ 0.68 × 0.10	灰褐色粘質土		近現代	
2	B3~C3	南北	皿状	(6.68) × 0.50 ~ 0.88 × 0.09	灰黄褐色粘質土		近現代	
3	B-C3	南北	レンズ状	(2.38) × 0.30 ~ 0.38 × 0.08	灰黄褐色粘質土		近現代	
4	D-E3	南北	皿状	(4.72) × 0.51 ~ 0.76 × 0.06	灰褐色粘質土		近現代	
5	E2	東西	皿状	(2.00) × 0.30 ~ 0.40 × 0.08	灰褐色粘質土		近現代	
6	F2-3	北東-南西	皿状	(4.88) × 0.50 ~ 0.92 × 0.16	灰黄褐色粘質土		近現代	

表 17 土坑一覧

土坑 (S K)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	G4~H5	楕円形	逆台形状	1.15 × 0.73 × 0.53	黒褐色土	弥・石	弥生前期末	
2	G-H4	不整形円形	逆台形状	1.14 × 0.93 × 0.45	黒褐色土	弥・石	弥生前期末	
3	D2-3	隅丸長方形	袋状	1.58 × 1.33 × 0.83	黒褐色土 他	陶・瓦・石	18C後~19C前	
4	D3	不整形円形	逆台形状	1.56 × 0.83 × 0.20	黒褐色土		不明	
5	D2~E3	隅丸長方形	逆台形状	1.67 × 1.08 × 0.29	褐色土 (明黄褐色土混入)	漆喰	近代以降	
6	E2	隅丸長方形	逆台形状	1.53 × 1.52 × 0.52	褐色土 他	陶・漆喰	18C後~19C前	
7	D-E3	楕円形	逆台形状	1.37 × 1.10 × 0.11	灰褐色粘質土		不明	
8	E3	円形	筒状	1.10 × 1.06 × 0.77	にぶい黄褐色土	漆喰	近代以降	
9	E3	不整形円形	逆台形状	1.56 × 0.96 × 0.23	灰褐色粘質土		不明	

遺物観察表

表 18 柱穴一覧

柱穴 (S.P)	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
1	H4	楕円形	0.30 × 0.18 × 0.12	黒褐色粘質土		
2	H4	円形	0.10 × 0.10 × 0.08	灰黄褐色粘質土		
3	F5	不整楕円形	0.38 × 0.30 × 0.10	暗褐色粘質土		柱痕
4	D3	不整楕円形	0.28 × 0.18 × 0.12	黒褐色粘質土		
5	E2	円形	0.10 × 0.10 × 0.08	黒褐色粘質土		
6	D3	楕円形	0.48 × 0.36 × 0.10	黒褐色粘質土 (明黄褐色粘質土がアロック状に混入)		
7	C3	楕円形	0.32 × 0.28 × 0.17	灰黄褐色粘質土		
8	C3	円形	0.30 × 0.29 × 0.14	灰黄褐色粘質土		
9	E2	(円形)	(0.62) × (0.30)	灰黄褐色粘質土		未掘
10	E2	円形	0.26 × 0.25 × 0.20	褐色粘質土		
11	D-E2	円形	0.12 × 0.11 × 0.18	黒褐色粘質土		
12	D2	円形	0.13 × 0.12 × 0.22	黒褐色粘質土		
13	D2	楕円形	0.16 × 0.12 × 0.06	黒褐色粘質土 (明黄褐色粘質土がアロック状に混入)		
14	C-D2	楕円形	0.38 × 0.36 × 0.26	黒褐色粘質土 (明黄褐色粘質土がアロック状に混入)		柱痕
15	D3	楕円形	0.20 × 0.17 × 0.20	灰黄褐色粘質土		
16	B3	不整円形	0.20 × 0.20 × 0.30	暗褐色粘質土		
17	B2	楕円形	0.30 × 0.18 × 0.06	黒褐色粘質土		
18	C2	円形	0.18 × 0.18 × 0.17	黒褐色粘質土		
19	C3	楕円形	0.15 × 0.10 × 0.36	暗褐色粘質土		
20	C3	円形	0.24 × 0.23 × 0.12	灰黄褐色粘質土		
21	C-D3	不整円形	0.41 × 0.39 × 0.34	灰黄褐色粘質土		
22	D3	楕円形	0.22 × 0.16 × 0.14	灰黄褐色粘質土		
23	D3	円形	0.12 × 0.11 × 0.08	灰黄褐色粘質土		
24	D3	楕円形	0.11 × 0.10 × 0.10	灰黄褐色粘質土		
25	D3	楕円形	0.23 × 0.16 × 0.11	灰黄褐色粘質土		
26	D2	円形	0.25 × 0.25 × 0.15	黒褐色粘質土		
27	E2	円形	0.11 × 0.11 × 0.20	灰黄褐色粘質土		
28	E2	円形	0.11 × 0.11 × 0.14	灰黄褐色粘質土		
29	C-D2	楕円形	0.26 × 0.25 × 0.18	灰黄褐色粘質土		

表 19 SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
147	壺	底径 (68) 残高 42	平底。1/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 褐色	灰 (1-3) ○		16

表 20 SK2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
148	壺	口径 (6.4) 残高 3.1	厚みのある平底。1/4 の残存。	ヨコナデ	ナデ	橙色 橙色	長 (1-3) ○		16

表 21 SK3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
149	皿	口径 (12.8) 底径 8.4 器高 3.8	輪花皿。蛇ノ目高台費付及び底部は無軸。印判による染付。肥前系。4/5 の残存。	施釉	施釉	白色 白色	灰白色 ○		16

表 22 SK6 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
150	鉢	口径 (20.4) 底径 10.0 器高 6.1	底部焼。高台費付は無軸。全面に印判による染付 (青) → 総付け (赤)。1/2 の残存。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	灰白色 ○		16

表 23 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
151	壺	口径 (12.7) 残高 2.6	外反口縁。口縁端部は丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
152	壺	残高 2.7	短頸壺。肩部に沈線 2 条と刺突列点文あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
153	壺	残高 6.1	胴部小片。	平行叩き	同心円叩き 円弧叩き	灰色 灰色	密 ○		
154	羅鉢	口径 (31.0) 残高 9.3	楕円鉢。口縁部に凹線 2 条、体部内面に 11 条 1 組の条線あり。1/4 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	褐色 褐色	密 ○		
155	焙烙	口径 (33.8) 残高 3.5	外反口縁。口縁端部は内方へ肥厚し、径 0.6cm 大の孔を穿つ。小片。	ヨココナデ 巻ナデ	ヨココナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ○	保存者	16
156	土釜	残高 5.9	脚部片。断面円形。	ナデ	—	褐色	石・長 (1-2) ○		
157	高坏	残高 4.5	供脚。外面に面取痕あり。	ハケ (マメツ)	ナデ	橙色 褐色	砂粒 赤色土粒 ○		
158	蓋	口径 (11.0) 残高 3.5	瓦質土器。天井部に径 1.6cm 大の孔あり。1/3 の残存。	突回転ナデ 凹ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ○		
159	碗	口径 (10.0) 底径 4.7 器高 6.4	磁器。全面に透明釉が掛けられているが、高台費付部分は無軸。器形に歪みあり。4/5 の残存。	施釉	施釉	白色 白色	白色 ○		16
160	碗	底径 (3.3) 残高 4.3	陶器。体部外面に染付 (赤) あり。1/5 の残存。	施釉	施釉	灰黄色 灰黄色	灰黄色 ○		
161	碗	底径 3.4 残高 3.4	磁器。体部外面と底部に染付あり。4/5 の残存。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	灰白色 ○		
162	碗	残高 4.8	陶器。小片。	施釉	施釉	灰黄色 灰黄色	灰黄色 ○		
163	碗	口径 (9.4) 底径 (3.6) 器高 4.0	磁器小碗。外面に染付 (赤) あり。口縁部内面に圈線 1 条あり。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	灰白色 ○		16
164	角坏	残高 2.2	磁器。型押成形。1/4 の残存。	施釉	施釉	白色 白色	白色 ○		
165	皿	口径 (12.6) 底径 (7.8) 器高 3.4	紙部焼。印判による染付。2/3 の残存。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	灰白色 ○		16

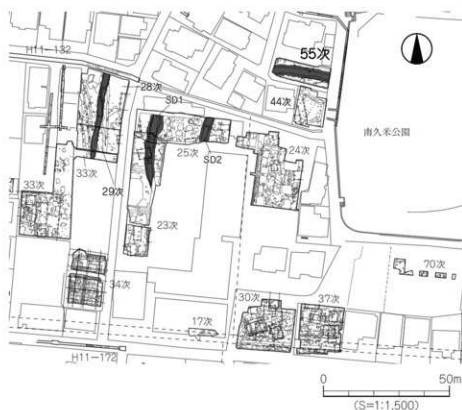
第5章 調査の成果と課題

本書掲載の2遺跡からは、縄文時代から近現代までの遺構・遺物を確認した。ここでは、遺跡のまとめを行う。

1. 久米高畑遺跡 55次調査

調査では、縄文時代から近現代までの遺構・遺物を検出した。縄文時代の遺構は未検出であるが、時期の異なる遺構内から晩期後半に時期比定される土器片が少量出土している。調査地の所在する来住台地上では、縄文時代の遺構・遺物が散見されているが、集落様相や構造解明には至っておらず、今後の課題である。

次に、弥生時代であるが、注目される遺構は溝SD1である。最大幅4.6m、深さ1.1mを測る規模の大きな溝で、溝からは弥生時代前期末から中期初頭に時期比定される土器や石器が大量に出土した。このうち、土器は完形品が少なく、大半は破片ばかりである。また、石器には未成品や破損品が数多く見られた。土層堆積状況や遺物の出土状況から、最終的には遺物を投棄し、人為的に埋め戻された溝と考えられる。このような大溝は、これまでに来住台地上で数例発見されている。調査地西方にあ



第46図 久米高畑遺跡 25次・55次大溝

表 24 来住台地上の大溝一覧

調査名	遺構名	規模	断面形	埋土	出土遺物
		長さ×幅×深さ (m)			
久米高畑遺跡 (23次)	SD001	22.00 × 3.00 × 1.00	逆台形状	黒褐色土 他	弥生・石
久米高畑遺跡 (25次)	SD1	10.55 × 3.70 × 1.00	逆台形状	黒褐色土 他	弥生・石
	SD2	9.70 × 3.95 × 1.50	逆台形状	黒褐色土 他	弥生・須恵・石・鉄・管玉
久米高畑遺跡 (28・29次)	SD006	31.00 × 3.60 × 0.60	逆台形状	黒褐色土 他	弥生・石

る久米高畑遺跡 25 次調査からは 2 条の並走する溝 (SD1・2) が検出されている。最大幅 3.95m、深さ 1.0 ~ 1.5 m の大溝で、溝からは該期の遺物が大量に出土している。また、同調査地の南隣には久米高畑遺跡 23 次調査地があり、25 次調査検出の溝 SD1 の延長部である溝 SD001 が検出されている。さらに、25 次調査地の西方にある久米高畑遺跡 28・29 次調査では最大幅 3.6 m、深さ 60cm を測る大溝が検出されている。これらの配置状況から判断すると、本調査検出の溝 SD1 は 25 次調査検出の溝 SD2 と同一溝の可能性が高いと考えられる。また、調査地南方にある久米高畑遺跡 44 次調査では同様の溝は検出されていない。なお、溝内側の空間には久米高畑遺跡 24 次調査地があるが、ここからは該期とされる 10 数基の土坑が検出されている。

第 3 章でもふれたように、松山平野内では岩崎遺跡において同時期の大溝が検出され、溝内側には 200 基を超える土坑群を検出している。必ずしも同じ状況とは断定できないが、岩崎遺跡では土坑群を保全するために掘削された溝の可能性が高いと考えられており、来住台地上でも同様の空間が存在していたのではないかと推測される。いずれにせよ、松山平野内における弥生前期集落の構造解明には、今回検出した大溝は貴重な資料といえよう (第 46 図、表 24)。

次に、出土品を概観する。本稿に掲載した溝 SD1 出土遺物 124 点の内訳は、土器が 113 点、石器は 11 点である。土器は縄文土器 6 点、弥生土器 107 点があり、弥生土器の大半は前期末から中期初頭に時期比定されるものであるが、中層には中期後半や後期の土器片が数点含まれている。SD1 からは弥生時代前期末から中期初頭の甕形土器や壺形土器、鉢形土器、蓋形土器、ミニチュア品が出土したが、高坏形土器の出土はない。

ここで、前期末から中期初頭に時期比定される弥生土器について、各器種の形態や施文等について整理する (表 25 ~ 27)。

甕形土器の口縁部成形には折曲と貼付とがあり、後者には口唇部より下がった位置に粘土紐を貼付けるものが 2 点 (14・92) ある。量度でみると口径が 40cm を超える大型品と、それ以外の中・小型品がある。大型品は 3 点 (15・16・93) あり、15・16 は貼付、93 は折曲により口縁部を成形する。器形態は胴部上半部が直立気味に立ち上がり、胴部最大径は口径を凌ぐものはない。底部形態は平底と僅かに上げ底をなすものがあるが、穿孔のある所謂コシキ形土器への転用品が 3 点 (28 ~ 30) みられる。器表面の調整では、外面にタテないしナメ方向のヘラミガキ、内面はヨコ方向のヘラミガキを施すものが多い。施文は口縁端部には刻目を施すものが多く、胴部にはヘラないし櫛状工具による沈線文が主体で、沈線文と刺突文や山形文、竹管文が組み合うものもある。

壺形土器には頸部の短いものと長いものがあり、短い頸部をもつものは、口縁部が短く外反する。

なお、口径が40cmを超える大型品(62・117)は頸部径が広く、大型品と長い頸部を持つものには口縁部内面に凸帯を貼付けるもの3点(46・47・49)がある。施文は頸部下位や肩部、胴部中位にあり、頸部はヘラ描き沈線文を主体とし、口縁部には斜格子目文を施すもの2点(39・41)がある。肩部には沈線文や刺突文のほかに貝殻腹縁による斜格子目文を施すもの2点(54・55)がある。胴部には沈線文と凸帯文があり、凸帯には凸帯上に2段の刻目文(連鎖状刻目文)を施すもの(103)もある。なお、大型品には口縁部や胴部にタテ方向の沈線が描かれるもの3点(62・63・117)がある。調整はヘラミガキが主体であり、ハケメ調整のものもみられる。

鉢形土器は折曲により口縁部を成形するもの1点(32)があり、蓋形土器は甕形土器用のもの1点(76)がある。このほか、手づくね成形によるミニチュア品3点(77・106・107)がある。

沈線文にはヘラ状工具と櫛状工具によるものがあるが、SD1出土品では、その割合は概ね1:1である。甕形土器の形態をみるとバケツ形が大半を占め、胴部に張りをもつものは極めて少ない。このことから、形態は前期末の特徴を示しているが、施文は櫛状工具を使用するものが多く、これらのことから、SD1出土品は弥生時代前期末から中期初頭に時期比定されるものと判断される。

このほかには、SD1と第Ⅲ層中より土製の紡錘車5点(78～80・119・140)が出土している。すべて、

表 25 甕形土器の施文一覧

部位	口縁部			胴部					
	点数	無文	刻目文	点数	無文	沈線文	沈線文+刺突文	沈線文+山形文	沈線文+竹管文
中型	19	5	14	25	9	4	9	1	2
大型	3	1	2	3	1	0	2	0	0

表 26 甕形土器の口縁部施文一覧

部位	口縁部						口縁部内面		
	点数	無文	沈線文	沈線文+刻目文	刻目文	斜格子目文	点数	無文	凸帯文
中型	19	13	1	1	2	2	19	16	3
大型	2	0	0	2	0	0	2	0	2

表 27 甕形土器の頸部・肩部・胴部施文一覧

部位	頸部					肩部				
	点数	無文	沈線文	沈線文+刺突文	凸帯文(刻目)	点数	無文	沈線文	沈線文+刺突文	沈線文+斜格子目文
中型	23	9	10	3	1	9	4	2	1	2
大型	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0

部位	胴部							
	点数	無文	沈線文	沈線文+縦沈線文	沈線文+凸帯文(押圧)	沈線文+凸帯文(刻目)	凸帯文	
中型	9	3	2	0	1	2	1	
大型	2	0	0	1	0	1	0	

甕形土器もしくは壺形土器の胴部片を再加工したもので、SD1 出土品には製作途中と思われる未成品が3点(79・80・119)含まれている。なお、製品は両面から穿孔されている。

石器は11点出土しており、器種構成は石鎌1点(86)、石庖丁1点(109)、石鎌1点(110)、伐採斧3点(84・111・121)、敲石1点(112)、台石1点(85)、スクレイパー3点(113・122・124)である。石鎌は凹基無茎鎌で、石材はサヌカイトを使用している。石庖丁は楕円形状の磨製、石鎌は打製で、両者ともに緑色片岩製である。伐採斧は結晶片岩、砂岩、玄武岩を使用しているが、121は刃部を含め石器全体が丸みを帯びていることから、擦石に転用されたものと考えられる。なお、スクレイパーは113がチャート、122は黒曜石、124は安山岩製である。

弥生時代以外の遺物では、第Ⅲ層中より赤色顔料が塗られた土師器2点(143・144)が出土している。143は飛鳥時代、144は奈良時代の高坏で、両者ともに脚柱部には面取りの痕跡が認められる。

2. 久米高畑遺跡 56 次調査

調査では、弥生時代から近現代までの遺構・遺物を確認した。弥生時代は前期末の土坑2基を検出した。調査地近隣にある久米高畑遺跡69次調査でも同時期の土坑が検出され、さらに調査地北方の久米高畑遺跡26次調査地からも該期の土坑が数多く検出されている。これら以外にも来住台地上では前期末から中期初頭の土坑群が多数確認されており、55次調査で検出したような環濠の要素をもつ大溝との関係が注目されている。古墳時代から中・近世の遺構は未検出であるが、6世紀から7世紀の土師器や須恵器のほか、鎌倉時代や室町時代の土器や陶磁器などが出土している。

このほかには近世から近代、幕末から明治時代初頭に時期比定される陶磁器の出土した土坑が2基検出されている。

今回実施した2件の調査からは、官衙に関する直接的な資料は得られなかったものの、55次調査では包含層資料ではあるが、飛鳥時代や奈良時代の塗彩土器が出土している。これらの土器は間接的ではあるが、官衙に関する資料といえる。

久米高畑遺跡55次調査における大溝の検出は、来住台地上に存在する弥生時代前期末から中期初頭段階の環濠集落の存在を明らかにするうえで大変重要な成果である。さらに、環濠の構造や規模等を解明するうえでも貴重な資料である。また、56次調査では明確な遺構は検出されなかったが、中世から近世の遺物が出土しており、2件の調査成果は台地上に展開する弥生前期集落はもとより、中世や近世における集落様相を解明するうえで、貴重な資料といえよう。

写真図版

写真図版 1～11：久米高畑遺跡 55 次調査

写真図版 12～16：久米高畑遺跡 56 次調査



1. 遺構検出状況（東より）



2. 遺構完振状況（東より）

図
版
2



1. SD4・5・6 検出状況 (北東より)



2. SD1 ベルト①土層 (東より)



1. SD1 ベルト②土層 (東より)



2. SD15・SK2 検出状況 (東より)

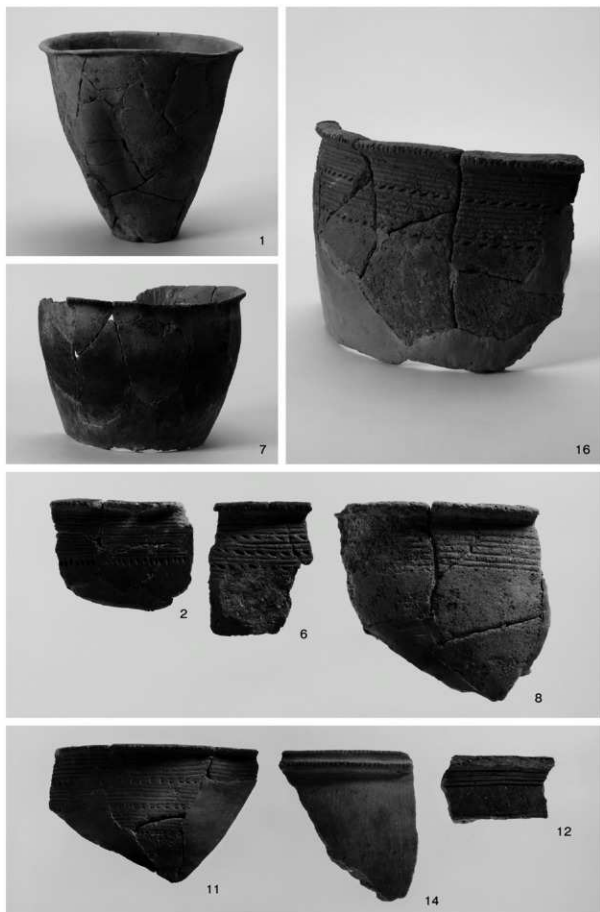
図
版
4



1. SK1 検出状況 (東より)

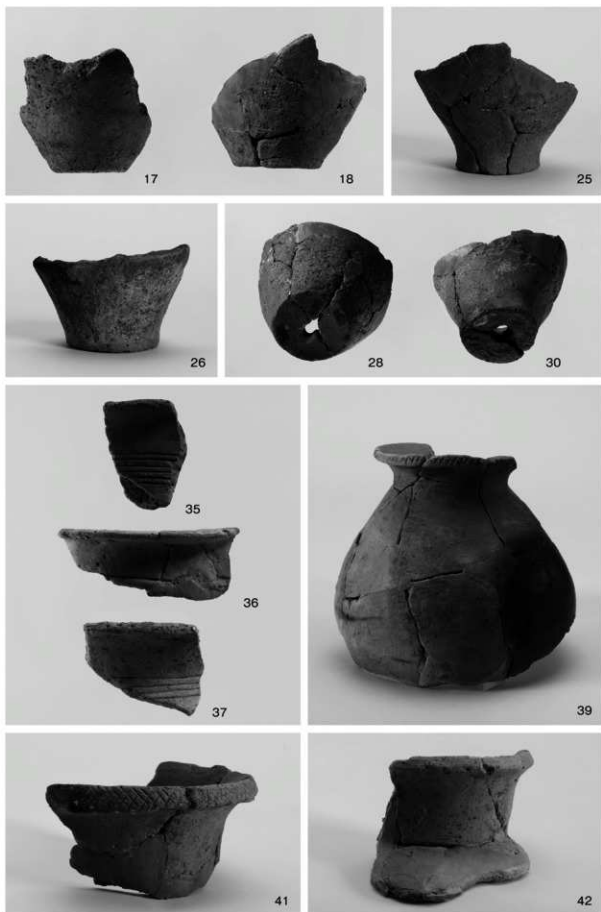


2. SP34 検出状況 (北より)

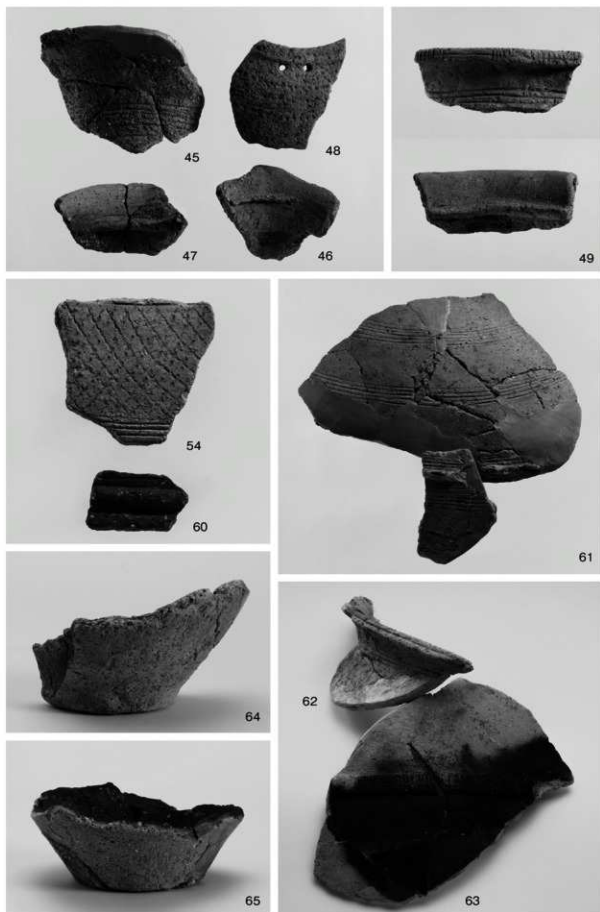


1. SD1 下層出土遺物①

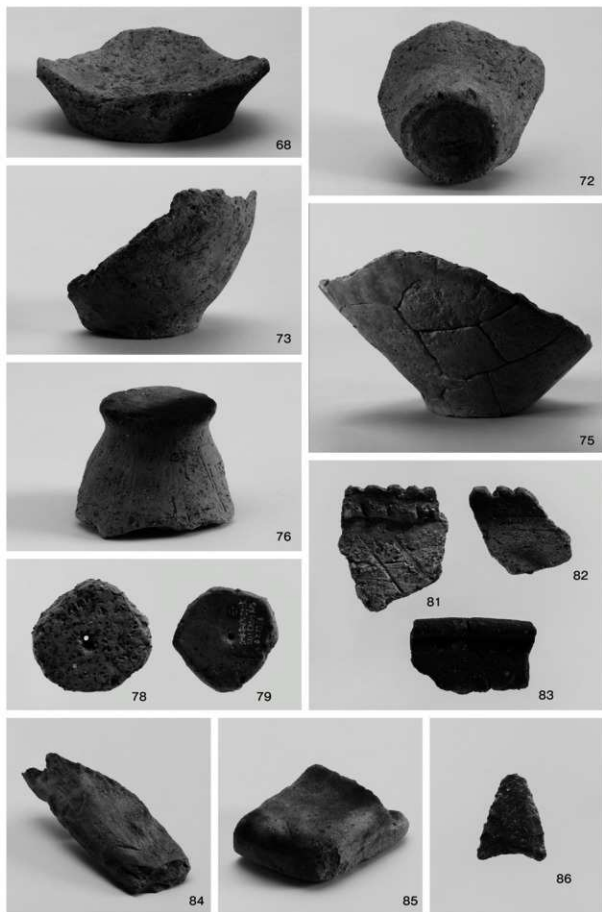
図
版
6



1. SD1 下層出土遺物②



1. SD1 下層出土遺物③

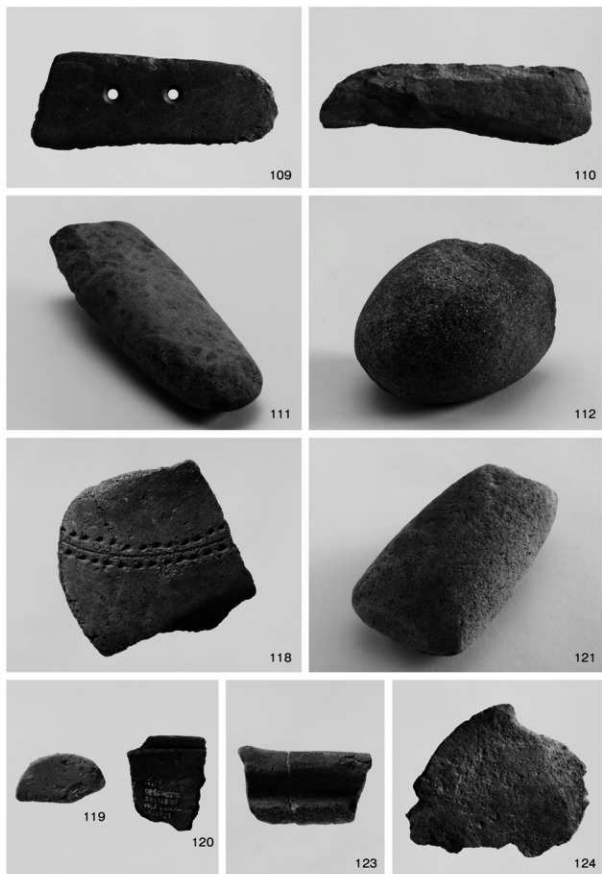


1. SD1 下層出土遺物④

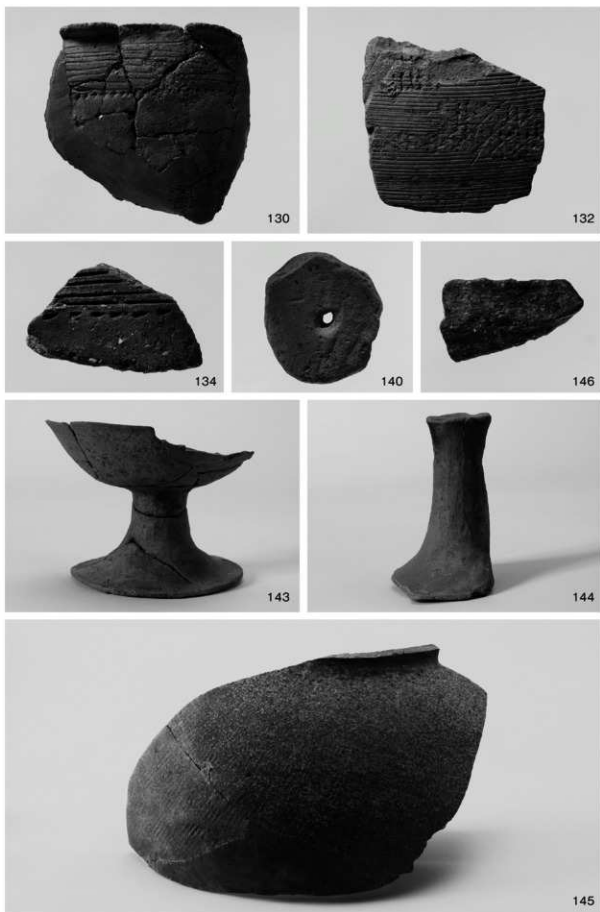


1. SD1 中層出土遺物①

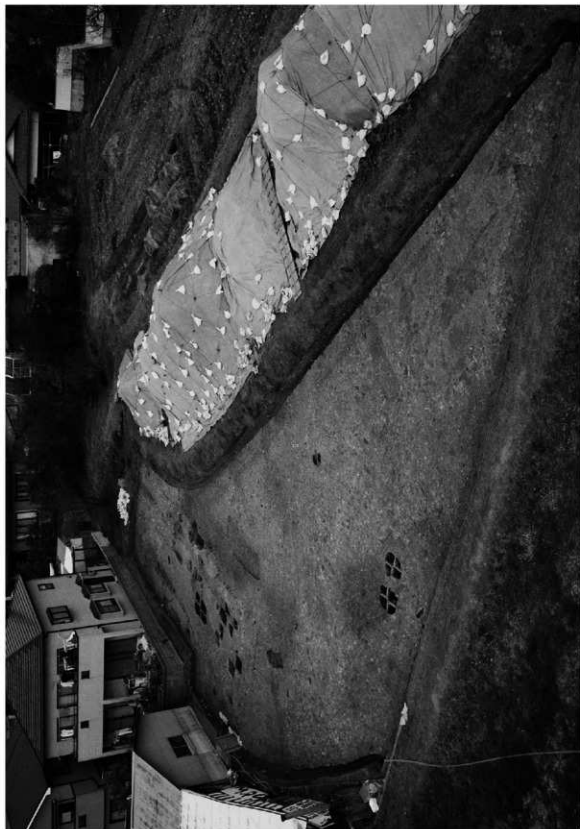
図
版
10



1. 出土遺物 (SD1 中層②: 109 ~ 112, SD1 ベルト・トレンチ: 118 ~ 121, SD1 地点不明: 123・124)



1. 出土遺物 (SD5 : 130、SD11 : 132、SK1 : 134、第Ⅲ層 : 140・143～146)



1. 発掘状況 (南より)



1. 南壁土層（北西より）



2. SD1 検出状況（北より）



1. SK1 検出状況 (南東より)



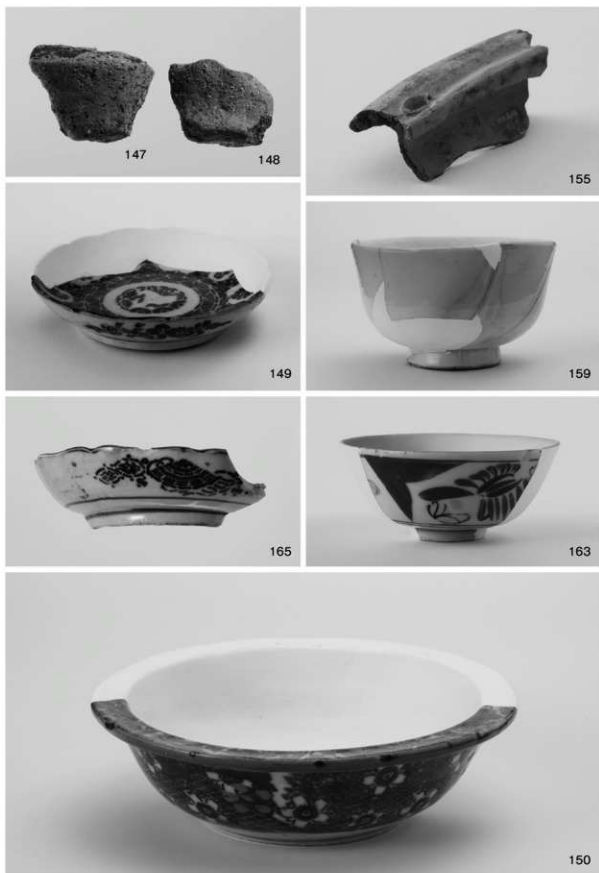
2. SK2 検出状況 (北東より)



1. SK3 検出状況（北西より）



2. SK3・5・7・8 検出状況（南より）



1. 出土遺物 (SK1: 147、SK2: 148、SK3: 149、SK6: 150、地点不明: 155・159・163・165)

報告書抄録

ふりがな	くめたかばたけいせき
書名	久米高畑遺跡-55次・56次調査-
副書名	国庫補助市内遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第199集
編著者名	宮内 慎一・大西 朋子
編集機関	公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67番地6 TEL089-923-6363
発行年月日	西暦2020(令和2)年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	道庁番号					
久米高畑遺跡 55次調査	松山市南久米町 715番地+5	38201	403	33°48'45"	132°48'7"	20020729)20021111	213.28	重要遺跡 確認調査
久米高畑遺跡 56次調査	松山市米住町 919-924番地	38201	406	33°48'36"	132°47'57"	20021118)20030113	561.00	重要遺跡 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
久米高畑遺跡 55次調査	集落	縄文 弥生 古墳 古代 近現代		溝・土坑		縄文 弥生・石 土師・須恵 土師 陶磁		弥生時代前期末から 中期初頭の大溝を 検出
久米高畑遺跡 56次調査	集落	弥生 古墳 古代 中世 近世～ 近現代		土坑 土坑 掘跡		弥生 須恵 土師 土師・陶磁 陶磁		弥生時代前期末の 土坑を検出
要約	<p>今回報告する2件の調査では、縄文時代から近現代までの遺構・遺物を確認した。久米高畑遺跡55次調査では、弥生時代前期末から中期初頭の大溝を検出した。調査地が所在する米住台地上では、該期の溝が数箇所検出されており、環濠集落の存在が示唆されている。溝の全容は不明な点が多く、今回の検出は溝の規模や形状などを解明するうえで貴重な成果といえる。一方、久米高畑遺跡56次調査からは、55次調査と同様、弥生時代前期末から中期初頭の土坑が検出された。台地上には該期の土坑が多数検出されており、前期集落の構造や範囲解明における追加資料となる。</p>							

松山市文化財調査報告書 第199集

久米高畑遺跡

－55次・56次調査－

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

令和2年3月25日 発行

編集 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
発行 埋蔵文化財センター
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

松山市教育委員会
〒790-0003 松山市三番町六丁目6番地1
TEL (089) 948-6605

印刷 岡田印刷株式会社
〒790-0012 松山市湊町7丁目1-8
TEL (089) 941-9111
